

# ぶどうの木

第 38 号 (2013 年 5 月発行)

## 「ぶどうの木」 第三八号 目次

巻頭言

御言に導かれて

母の信仰と生涯

主の備えの道

姉の信仰と召天

信仰告白

受洗のあかし

夏の終わりに —— 神様への手紙 ——

主は癒し主

八幡前田教会に導かれて(後編)

五七五

落第教師終了の記

信仰雑感(六)

アジア大会回想記

アメリカ西部大自然紀行記

編集後記

榎本和義	嶋山英	渡部節	平岡富美	正野真	植木賢一	原田日登	井田れい	長田正	松原宏	伊規須太	正野真	首藤正	長田正	正野真
師	子	子	子	宏	郎	美	子	幸	篤	郎	宏	正	幸	宏
1	2	5	9	15	32	34	36	39	43	51	52	56	61	69

八幡前田教会  
基督伝道隊  
福岡大濠公園教会  
戸畑教会

## 巻頭言

榎本和義 牧師

「主よ、あなたはみわざをもつてわたしを楽しませられました。わたしはあなたのみ手のわざを喜び歌います」

(詩篇九二・四)

昨年「ぶどうの木」三七号を発行してはや一年が過ぎようとしています。「光陰矢のごとし」と言われるごとく、目の前の事柄に忙しくしているうち瞬く間に時が過ぎて行きます。過ぎ去ってしまふと、なにごとくもなかつたように消えてしまいます。それゆえ、事もなく平穩・無事に過ぎたように思いますが、冷静に振り返って見ると、案外忘れていくことが多くて、実は盛りに沢山な事のなかを過ぎてきたのです。

過去に受けた様々なことは例外なくことごとく神様によるわざです。みことばにあるように、神様はみわざをもって私たちを楽しませてくださるのです。しかし、人は自分勝手に事の良・悪いを決めて、神様のみ思いをくみ取ることができないでいます。人の目に不幸と見えることも、長い人生のなかで見る

ならただ単に不幸だと言いきれません。「主よ、あなたのみわざはいかに多いことであろう。あなたはこれらをみな知恵をもって造られた。地はあなたの造られたもので満ちている」(詩篇一〇四・二四)と詠われています。神様の造られたものはみな良いものです。それを信じて、神様のみわざを喜び歌い、感謝することが私たちの生かされている使命です。

今年も「ぶどうの木」三八号を発行することができました。なにげない日常の営みにあつて、主のご愛に満ちたみ手を感じ、みわざを喜び歌ったあかしです。投稿者のみならず、読者である私たちも共に主をほめたたえる恵みをいただけるのは感謝以外にありません。

主のみわざは今も休みなく続いています。事の大小を問わず、「すべてが主のみわざです」と確信して、喜び楽しもうではありませんか。次回はその恵みを分けてください。

主の祝福を祈りつつ

## 御言に導かれて

畠山英子（戸畑）

私、藤本春市が父で、祖父母、両親、弟も皆お救いを受けました。今日まで数々の主の御憐れみを教えてみれば、大変な主のお恵みを賜りました。

「神はわれらの避け所また力である。悩める時のいと近き助けである」（詩篇四六・一）

「見よ、わたしは主である、すべて命ある者の神である。わたしにできない事があるるか」（エレミヤ書三二・二七）

「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていないさい」（第二テモテ二・八）

この御言を、いつも私の机の前に掲げて、毎朝、拝読いたし、祈らせていただいています。

主の御憐れみと御愛、お赦しに感謝いたしております。私がお救いを受けましたのは、小学四年生の十一歳の時、河本様のお二階の八畳二間、八幡前田教会の日曜学校から始まりました。至らぬ私、罪深い私を今日八七歳まで、主は私を生かし、愛し、恵んでくださいます。今日あることができましたことを、感謝いたします。

二〇〇八年十二月三十日夕方、お風呂の掃除をしていましたら、急に体が動かなくなり、部屋にやつと帰って倒れてしまいました。幸い嫁のきみえさんが仕事から帰り、すぐに救急車で小倉記念病院に連れて行ってくれました。

病名は背中の動脈の横の静脈解離、一部が剥けて落ちたのだそうです。何も分からずに、皆様のお祈りと主のお救いにより、二、三ヶ月経った五月頃になって、立派に回復いたし、その時に与えられた御言は忘れることができません。

「わが神、主よ、わたしがあなたにむかって助けを叫び求めると、あなたはわたしをいやしてくださいました。

主よ、あなたはわたしの魂を陰府からひきあげ、墓に下る者のうちから、わたしを生き返らせてくださいました」（詩篇三十・一二）

尊い御言を心より感謝し、六月の終わりに退院ができました。私は病院のベッドで、「今から帰ります。主よ、この八七年間、主に心配をおかけするばかりで、何一つ主のお喜びになることはできませんでした。残された命を、主第一に生きて行きます。

す。もう少し、命をお与えください。」とお祈りいたしました。主はお聞きくださいまして、二〇二二年の今日まで、この地上の生活を与えてくださいました。病院の医師が、「死んでもおかしくない大病に、よく生きられた。」と言われたと聞きました。私の近所の方は、同じ病名でお亡くなりになったそうです。

退院後に私が自転車にも乗るので、近所の方がびつくりされました。庭の草も全部刈り、夏場のキュウリを植えようと、鍬をもつて広くもない庭を耕したのです。それが祟りました。せっかく与えられた健康を考えなかつたのです。朝起きますと、腰が立たなくなり、曲がつてしまいました。

それとても、二、三日して、また足腰が立てるようになりまして、お墓に花を生けに参りました。私の家の近所は仏教・神道(天照大神)のお墓で、村の方は必ず一日と十五日には、お花や榊(さかき)が生けられます。私の家のお墓は、黒い石に十字架が彫ってあり、「我らの国籍は天にあり」という御言を伊規須先生から与えられましたので、それを刻んでいます。その御言のゆえに、粗末にはできません。朝夕、お水を替えに参ります。そして、お祈りをして帰ります。

ところが、お水を入れ替えて、ちょっとよそ見をしていましたら、御影石がツルツルしているのに滑りこけて、息ができません。お墓に寝ていました。胸を打っていたらしいのです。

その時、主は御声を下さいました。「わたしは主であつて、あなたをいやすものである」私は目が覚めて、「ハイッ」と言つて立ち上がりました。またまた主は、私を癒してくださいましたのです。

その後も、イースター、ペンテコステ、全ての聖日礼拝に御側にお招きくださいました。戸畑教会の休止に伴つて、八幡前田教会の礼拝に出るようになりましたが、平成二四年九月十六日の聖日礼拝にも出ることができました。感謝でございます。私も晩年となり、腰も曲がり、歩けなくなつても、御聖日には必ずご礼拝の民としていただけます。皆様方のご親切、ありがとうございます。日曜日だけ教会に行かせていただくのですが、他の集会に行きたくても、連れて行つてくれる息子の仕事の関係で思うようになりません。

河本の奥様が、「主は、『わが恵み、汝に足れり』と仰つておられますよ。」と教えてくださり、涙が出るほどうれしく、主に感謝いたしました。

労災病院におられた医師が近くに開業なさり、「あれだけの大病でこんなに元気なのは、あなただけです。」と言われました。改めて、主の恵みを感謝しました。

もう一つの主の御声……。私の家は呉服屋でしたが、時代が悪く、商売が低迷して、維持できなくなりました。息子は、野

菜の卸屋「フレッシュ九州」のアルバイトをしております。今までの呉服の代金をお米で取ってくれと、米を作っている親戚から言われ、今年の米十一俵を持って来ました。来年の新米にして欲しいと申しましたら、来年分はすでに農協と契約しているので、回されないとのことでした。来年に新米が来ると思っていた嫁のきみえさんが、今年の分として大分県の実家に頼んで八俵を買いましたので、合せて十九俵となりました。あまり多いので、どうしてよいか分かりません。私の地域は米所、米を作っておられる人が近所におられるので、皆さん前もって買っておられる。どうしたらよいか。お金に代え難いし、夏場は虫が湧く。ほとほと困り果てました。

その時、また主の御声です。「汝ら思い煩うな。ただ悉く祈りし、願ひし、かつ感謝して、己が求めを神に申し上げよ」とのピリピ書四章のイエス様の御声が聞こえました。私は祈りました。そして、やはりお聞きくださいました。

事情を知った近所の方が、「お米を売ってください」と電話を掛けて来たのです。そして、余った分全部を売り尽すことができました。飛び上るほどうれしく、何と主に感謝したらよいか分かりません。「イエス様、私のような者の祈りをお聞きくださいまして、ありがとうございます。また、その都度、御言を賜りまして感謝します。」

もう一つ、大事な事を忘れていました。ある時、誰が入れたのか分かりませんが、他の教会のパンフレット「命の光」(注：幕屋の信仰雑誌)が郵便受に入っていました。私は一寸開いただけで読みませんでした。真つ赤な火と硫黄の中で三人の男が苦しんでいる絵があり、それを見て大変な恐怖を感じました。主はそれを見せられたのです。私は第二の死という字を見ましたが、止めました。ふと、上を見上げると、主の御声、「我、限りなき愛をもて、汝を愛せり。故に、絶えず汝を恵むなり」「汝の罪、十字架に移転せり」尊い主の御声に、私の心は安らかなりました。

この度、八七年間の最後の時に、「ぶどうの木」にお証しさせていたでいて感謝です。主は憐れみ深く、怒ること遅く、豊かに許しを与えてくださいます。

私はいろいろな中、危ない中を通りましたが、「我は主であつて、汝を癒す者である」の御言を胸に懐いて、主と共に生かしていただきます。主はいつも、私の側にいらせられます。

## 母の信仰と生涯

渡部 節子（大阪集会）

母、友松春子は、二〇一二年七月二四日午後四時三五分、眠りながら静かに天に帰り、地上の百年の生涯を終えました。その有様は、丁度エノクが、死を見ないで、天に移された様で、母とは晩年よくエノクの様に願っていたその願いに応えるかのような安らかな最後でした。

母は一九一二年一月八日、名古屋に隣接していた東春日井郡森山町（現在の名古屋市守山区）の江戸時代より続く商家の長女として誕生しました。愛知高等師範附属小学校、淑徳高等女学校と進み、二一才の時、弁護士之父と結婚。三男四女の子供が与えられましたが、四一才で父と死別、女手一つで七人の子供を育て上げました。母は八十才で御救いを受け、キリスト者としての生涯に入られました。教会も遠く、その上、高齢で、通常の教会生活が出来ず、妹や私が実家に行った時、聖書の話をしたり、祈ったりする程度の隠れクリスチャン的生活でした。

この度の突然の召天で甥や姪から、「伯母さんがクリスチャ

ン？」と驚かれたので、母の信仰の歩みを前夜式で、告別式では母の信仰と生涯について短く話させていただきました。次に記させていただきます。

母は晩年まで、健康に恵まれ、子供達の家を訪ねるのを楽しみにしておりましたので、私方へも九四才位まで一人で電車に乗って来てくれました。それもいつも突然で、「今、名古屋。〇時〇分の電車に乗るので迎えに来て。」といった調子でした。大阪集会へは九三才の頃、私と一度だけ集わせていただきました。

前夜式次第（七月二五日）

司 式 河野勇一牧師（緑バプテスト教会）

讃美歌 三二二番

祈り

讃美歌 五一一番

証し — 母の信仰 — 渡部節子

式 辞 神のなさることは美しい

（伝道の書三・一〜十四節）

讃美歌 四八八番

祈り

献花

挨拶

## 証し — 母の信仰 —

母の信仰についてお話させていただきます。母は妹の集わせ  
ていただいている緑バプテスト教会の会員ですが、私が家族の  
中で一番早く、御救いに入られたというところで、お話させて  
いただくことになりました。母は今週日曜日夜（七月二二日）  
近所の病院に肺炎の疑いで入院しました。翌日七月二三日（月）  
は、息をすると胸の中でゼイゼイという音が大きく聞こえ、と  
ても苦しうでした。肺炎の治療で点滴をしていましたが、呼  
びかけると「ああ」と返事のように答えたり、手を握ったり、さ  
すったりして過ごしました。このまま、また元気になつてくれ  
ると思つていたのに、二四日（火）は、呼びかけにも反応はな  
く、呼吸も楽で、よく眠っている様でした。それは、昏睡に陥  
つていたと後で聞きました。そして、午後四時三五分頃、突然  
心臓の動きが止まり、本当に眠つたまま天に帰っていきました。  
母とはよくエノクの様に天に引き上げられる様にと祈つていま  
したが、イエス様は、その通り母が苦しむことなく、眠つたま  
ま御国に引き上げて下さいました。このことを思います時、主  
は私たちの願いに優つたことをしてくださると、感謝でござい  
ます。

母は幼少の頃、複雑な家庭に育ち、祖母の苦勞を見て育ちま  
したので、いつも夜、裏庭に出て夜空を見上げ、どこにいらっ

しやるかも分からない神様に、「お母さんを助けて下さい。」と  
子供心に祈つていたこと、またこのことは誰に教わつた訳では  
ないと、よく話してくれました。また五十代の頃、家族の人間  
關係に悩んで、当時、私が集わせていただいていた東京、阿佐  
ヶ谷の久遠基督（現久遠キリスト）教会の丹羽銀之先生にご相  
談してみたら、と申しましたところ、当時住んでいた国立から、  
一人で先生をお訪ねし、色々と優しくお導きいただいたことが、  
キリスト教に触れるきっかけとなりました。丹羽先生は、愛知  
県瀬戸のご出身ということで、一層親しみを覚え、その時先生  
が、「人間は、一人一人、みんな物差しが違うんだよ。」とおつ  
しやられたことが心に留まり、当時の悩みから少し解放されて  
いったようでした。でもその事をきっかけに、教会に通う訳で  
はなく、それから三十年後の八十才の時、緑内障の目が白内障  
になり、このまま失明してしまうのではないかと言われた時、  
当時求道させていた緑キリスト教会の兄姉と、妹、  
竹澤姉の祈りととりなしの中、手術の時は『イエス様、助けて  
下さい。』と祈っているのだよ。』と言いますと、「エス様、エス  
様。」と叫んでいたもので、医者から、静かにして下さいと言われ  
たと、後で語っております。このことを契機に、クリスチャ  
ンとしての新しい歩みが始まりました。母は決して完璧な人で  
はなく、人としての欠点も欠けも多い人でしたが、この様にし

て、母にふさわしく、携えて下さり、河野先生をはじめ、教会の兄姉に祈り、とりなしていただき、百歳の生涯を主の恵みでみたして下さったことは、子供として、何と感謝したら良いかわかりません。有難うございました。

### 葬儀式次第

前奏

讚美歌 三一二番

祈り

讚美歌 四九六番

証し — 母の信仰と生涯 — 渡部節子

式辞 よみがえりのいのちへの凱旋

(ヨハネ十一・二五、二六、ピリ。ピ三・二十、二一)

讚美歌 四八八番

頌栄 五四一番

祈り

挨拶

献花

証し — 母の信仰と生涯 —

母は、晩年認知症が進み、今年に入ってから家で何回も転倒

し額を切ったりして、よく外科のお世話になっておりました。それ以来、人と余り話をしなくなり、食事の時もお祈りをしないで一人でさつさと食べ始めてしまうので、「お母さん、ダメダメ、お祈りをしてからだよ。」というのが常でした。

でもその祈りも出来なくなっていました。ところが、召される四日前の七月二十日、たまたま私が行きました時、自分から手を合わせて大きな声で、はっきりとお祈りをしました。本当に長い間聞いた事のない様な力強い声で、私は今もはっきりと耳に残っております。主の祈りもと言いますと、一緒に間違はなく祈りました。それからいつも、一緒に暮らしていてくれる姉に、「一番お世話になり、有難う。」と何回も言いました。このことは、母の地上の生涯の終わりに近いことを悟っていたのかなど、今振り返って感慨深いものがあります。

聖書のお言葉に「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ三・十六)「この世」の部分に名前を入れて読んでみますと、「神は、そのひとり子を賜ったほどに、友松春子を愛して下さった。」、憐み深い神様は、母の信仰を整えて、御国に迎え入れて下さったことを確信し、心から感謝しています。

以前、私は、こんなに信仰のない母が天国に行ったら、右も



左も分らず困るのではないか、とひそかに心配しておりましたが、その考えは間違いだつたことを教えられました。

母は四一才で、夫と死別し、高校生から二才までの幼子がその手に残されました。苦勞の多い生涯であつたと思います。以前母に、「今までで一番嬉しかったことは何？」と聞いた時、子供たちが一人一人と巣だつていつた時と答えました。

「子等巣立ち 心安けき明け暮れを

一人静かに 暮すよろこび」

ウロ覚えですが、母の書きとめていた短歌です。

恵み深き神様は母の人生をこの様に、恵みと祝福で満たして下さいました。個人的には、余り良い子どもではなかつたけれど、河野先生はじめ、教会の兄弟のとりなして、キリスト者としての人生をこの様に全うさせていただいたことを、心より感謝致しております。母の人生に関わりを持って下さった、全ての方々、お一人お一人と、今日おみえでない方お一人お一人にも心より感謝を申し上げます。有難うございました。

母が百才七か月の生涯を終えたのは、くしくも、大阪集会当日でした。母が召されて一か月、淋しくもありますが、確かに御国に入られている確信を与えられ、感謝と平安を与えられ

ております。晩年の母の生涯を共に歩きながら、私は沢山の恵みを頂きました。

一つだけ付け加えさせていただきますと、母は父と死別してから六十年のほとんどを、生きるために働いたことがないことです。弟たちが大学、大学院と成長した頃、近くの若い大学教授と公務員のご夫妻が、産休明けで保育に困っておられた時、ベビーシッターとして、七年程働かせていただいたことがありました。これは母の唯一の社会的な生活でしたが、このご夫妻とは、終生良きおつきあいをさせていただきました。神様は軒の小雀をも養つて下さる方。子ども達は誰一人として、母の家計を助けた者はなく、全ては神様のなしてくださった御業と感謝し、御名をほめたたえます。母自身もよく、今までの生涯を振り返って、「知恵も力もない私を、よくぞ。(今まで守り導いて下さった)よくぞ。」と神様への感謝を忘れませんでした。

「主は遠くから、私に現われた。『永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。』(エレミヤ三二・三)《新改訳》」

## 主の備えの道

平岡 富美子（大濠）

「受洗五十年の証しを書いて下さい、とぶどうの木編集委員の方からです。」と榎本和義先生よりお聞きし、私は皆さまにお証しする文章はとも書けないと思ひ随分悩みましたが、主が与えてくださった恵みを主に對してお証しすべきと、書かせていただく事にしました。愚文ですが、お許しください。

「息子のお嫁さん探しに、博多から、松山在住の義兄宅にいられている女性が居ます。急ですが今日帰りに会ってくださいませんか。」義兄のお家のお隣のおばあちゃんより職場に電話がありました。そのおばあちゃんの近所に私の姉の新婚家庭があり、私は家で出来たお米や野菜などを通勤帰りによく運んでいました。

私がお伺いし、一通りごあいさつを終えてから、博多の方は、「キリスト教についてどう思われますか。」

「キリスト教はよく解りませんが、信仰のある生活はいいと思います。」

「では結婚したとすれば一緒に教会に行ってくださいます

か。」

「はい。」と私は答えました。

私の両親は弘法大師を信仰し、高校のクラスメイトにクリスチャンの友が居ました。彼女はとても静かで優しい方でした。「分け登る麓の道は多けれど 同じ高嶺の月をみるかな」と思ったのです。今思うと神様に申し訳なかつたと思います。

博多の方は「かえつてから本人に來させます。会つて下さいませんか。」と言われお別れしました。それから一か月余り経ちましたが、何も連絡はありませんでした。

同じ村の住職の方の息子さんと私は同級生だったので、そのご住職より、「京都のご住職でお嫁さんを探して欲しいと頼まれているので会つて欲しい。」と、教わつて居るお茶のお稽古の後で言われました。両親は「博多の方は、先方よりお断りしにくいから黙つておられるので、もうその話はなくなつたと思ふべきだろう。女の子は話がある内が華だからお受けしなさい。」

京都よりご本人が來られ、お見合いしました。何故か私を是非にと言つて下さいました。私ははじめてお目にかかつた時、とても物静かで頭も丸刈りにしておられ、びっくりしました。身長もあまり高くなかつたように思いました。私はお断りしましたが、「京都見物と思ひ、是非一度京都へおいで下さり、お寺

も見てください。切符、旅館は手配しますから。また〇〇日は京都のお祭りです。是非一度。」と何度もお誘いいただきました。私のような者にといいながらも、どうしてもお受け出来なかったのです。

そのような時、「博多からご本人が来ます。お会いしてくださいませんか。」と連絡がありました。お勤め帰りに毎日誘われるままに、お食事、映画にと時を過ごしました。話は進み、挙式は約一か月後の七月八日にと決め、清酒すませて帰られました。余りにも急でしたが、先方が望まれる様にとの両親の勧めで、私も納得しました。

初めて福岡を訪れ、式の前日福岡大濠公園教会に伺い、折瀬先生ご夫妻に笑顔で温かく迎えられました。私の不安は一掃されました。

結婚後は母と主人と私の三人で礼拝に出席し、母はいつも穏やかにしておられ、献金感謝のお祈りを奉げていました。

花嫁修業は嫁してから続けて下さいとの御約束通り、母と主人は、名ある御住職に家に来ていただきお茶とお花を習っておられ、その中に私も加えられました。料理学校へも行き始めました。

翌年五月、長男が誕生し、母は恵みの一号だから恵一にと、私達もそう思いました。その年の八月、私は折瀬先生や母の勧め

められるまま受洗しました。ただキリスト教を信じて歩むお仲間に入れていただき、神様に守られて生活して行くことができるとされたことを喜ぶ信仰でした。

次年には、次男誕生、今度は主人が、和を以て生きて行くようにと、和也と命名。次に三男が誕生し、母はとても喜び、聖教と命名してくれました。毎週の礼拝に家族揃って出席することとは、家族が同じ時を過ごす、その当時はその事がとても私には喜びでした。

長男が来春入園の初秋です。主人はたまたまドライブしていて、キリスト教保育園の文字が目に入り、願書をもらってきました。四月の開園準備に、運動場はドロコンコだったそうです。平尾の音楽学院付属幼稚園、末永博子園長です。あとで福岡大濠公園教会の末永文子姉の御息のお嫁さんと知りました。不思議です。キリスト教保育園で愛があり、子ども達は皆、素晴らしい幼児教育を受けることができました。

恵一の年中組の頃、クマノ母の上顎ガンが判りました。主人は一汐母親思いでしたから、空気の良い飯倉の土地に新居を建てようと願い、与えられました。池を造ると危ないからと、三人の男の子の遊び場に広く芝生を植えました。昭和三九年八月です。

母は、病氣は主に委ねてと、入院も手術も受けず、飯倉の家

の庭の周りの散歩を日課にして楽しみ、時々往診を受けての自宅療養でした。

昭和四三年七月に長女が誕生し、主人は、天下に泰平を得たとのみことばにより、泰子と命名しました。主人は泰子の可愛さの余り、「おんぶさせろ」と恥ずかしさも忘れ、家の砂場の廻りを肩ゆすつて歩いていました。

母は主に守られ、激しい痛みはありませんでした。時に「痛みますか？」と尋ねると、「痛いと言つても、とみ子さんが辛い思いをするだけだもんね。」と静かに力なく笑つておられました。軟らかい食べ物から流動食になつて三年、母は飽きもせず食べられました。

ある日の朝食の時、いつものように床に起き上がった背後で、私が支え、食べ物をお口に一緒に運んでいましたが、母の手の力が急に抜け、意識がなくなりました。すぐにホームドクターの手配で入院出来ました。翌日点滴を受けながら眠っていた目を開き、私に手をのべののです。「お母さん、私ここにいますよ。」としつかり手を握りましたが、静かに目を閉じて召されました。昭和四七年六月三十日です。その一週間前、私に、「お母さん（私のことです）本当にお世話になり有難うございました。」私は「お母さん、まだまだお世話させていただきますから。そんな……。」それが母との最後の会話でした。

お医者さんは短くて半年、長くても一年でしようと言われましたが、神様はガンと判明し九年も命を与えてくださいました。私ははじめ「私の命を三年短くしても構いません。どうか、三年は寿命を長くして下さい。」と祈り、三年経過した時は、神様まだまだ命を与えてくださいと、勝手な祈りでしたが、主は聞き入れて下さいました。

母の看病中は、主人が子ども達の洋服等の買物物は全てしてくださり、子ども達も何不自由なく育ちました。「わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。」（イコリント三・六）

私は母の亡きあと、母を慕い母のいない空しさに襲われました。私は母のようになりたいと思つようになりました。母が信じたイエス様は、今私が求めても解り、母のようになれるのではないかと思つたのです。「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変わることがない。」（ヘブル十三・八）後日、このみことばを知りました。

看病の為休んでいた礼拝、続いて各集会に出席し、主を求め、砂漠に水のように主に導かれました。当時の聖書の学び火曜会は、午前と夜、二回の集会がありました。榎本利三郎先生、百合子奥様は、午後の空き時間、御病氣の方をよくお見舞いされ、手を置き祈られ、御病氣の方はとても感謝しておられました。

主人の運転する車に私も一緒に一緒させていただき、車中の会話の中にもみことばを示してくださり、私には、すべての時が学びの時、恵みの時でした。

主人は母の納得していない手形詐欺の後始末に苦労の日々でした。私たちは共に「主よ助けて下さい。」と祈りながら、私はそれ迄加入していた保険会社より次々借入を行い、会社のやりくりに苦勞しました。最後には個人生活にも及び、それ迄いたお手伝いさんにも辞めていただき、恵一は食器洗い、和也は登校前に掃除機かけです。聖教は、「僕はトイレ掃除。」と言いました。男の子がトイレ掃除はと私も迷い、榎本利三郎先生にお伺いしました。「本人が言うのですから、男の子であろうとしてもらったらいいと思います。」とのお返事に私も安心し、三人の子ども達に家事を助けられ、そしてお小遣いとして渡しました。ある時、満ち足りるまではずかしめを受けよ、の詩篇のみことばがあり、私は心打たれました。母の残した会社を息子と主人と私で倒産させては世間の人に笑われる、と思ひ会社を続けることばかり考え、「主よ助けて下さい。」とのみ祈ってましたが、そうではなくすべてが主の御心のままにであり、主が通される道は歩ませていただくべきである。倒産し満ち足りるまではずかしめを受けよと主が通されるならば、人の噂も七五日、その七五日を我慢すればいい、それが主の与えられる道ならば

と思ひ「主よ倒産の恥も受けます。主の御心のままに導いてください。」と祈るようになりました。日々の買い物ですが、当時はお野菜の盛りは百円でした。玉ねぎにしようか、じゃがいもにしようか、二つは買えないと迷いながらの買い物でした。

主はしばらくの苦しみの後とありますが、もうこれで借りるところは無くなったと思う頃でした。主は豊かに祝福して下さい、会社を続けることが出来るようになったのです。主人と私は、主の導きと祝福を心から感謝しました。

榎本利三郎先生は、新会堂をと主より示され、教会を建てましょうと言われました。その起工式に、皆様の中に私共二人揃って加えられ、得難い恵みの時を覚え、主を崇め主に感謝を捧げました。

飯の礼拝堂は、当時、川を隔ててありました。福岡相互銀行研修所を一括でお借りしていました。とても広く一階は台所と食堂、二階は大工の丸山さんご夫妻他の工事関係者の宿泊場所でした。

だんだん工事が進み、ある日「平岡さん、出来るようになります。講壇の上の丸みと牧師室から講壇へ降りる階段も取れます。そして会堂から階段は見えないように取れました。一寸急な階段ですが取れます。」「そうですか、御無理お願ひしました。」「はい、その通りです。アハハッ。丸みも大変でしたが、

不思議です。神様が教えて下さったんですよ。」

当時榎本先生は、八幡前田教会と福岡大濠公園教会を兼牧しておられました。榎本先生が八幡でご用の時、福岡は藤掛邦夫兄のお証しでした。ある夜、祈祷会の帰り、藤掛兄が交通事故に遭い、入院され、そのため榎本先生の来られない時の礼拝は、榎本先生の説教テープでの礼拝となり、司会者をたてるようになりしました。榎本先生はお疲れ故かと思いますが、肺炎になられ、入院されましたが、病院より色々ご教示下さり、会堂建築は進みました。

榎本先生がお元気に退院され、一月十日過ぎだったと思います。「新会堂に常駐する主の器が与えられました。そのつもりで進めて下さい。」

二階の牧師室が手狭だからもう一室牧師室に、二階廊下の奥の方にドアを設置し、牧師室と集会室の区切りをつけるようになります。物置きも二階への踊り場奥に、洗面所の上にも物入れをと、主が思いを与えてくださいました。そのような時、丸山姉より「おいで下さるのは、榎本先生のご次男ご夫妻だそうですよ。」丸山姉と私は、手を取り躍り上がって喜び合いました。藤掛兄に続いて教会の鍵を預からせていただいていたのですが、新しい会堂が与えられるばかりか、常駐して下さる先生をお迎えできる、何と大きな主の恵みでしょう。日々会堂完成へ

の喜びが、一層満ち溢れるようになりました。

二月十一日、いよいよ会堂落成感謝の日です。ここに、その時挨拶させていただきました主人の原稿がありましたので、記させていただきます。

『坊向先生をはじめ、皆様方、今日はようこそおいでくださいました。色々お忙しい中を御都合いただき、ご臨席下さいましたことを、心からお礼申し上げます。』

『あなたこそ、生ける神の子キリストです。』……『わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。』（マタイ十六・十六〜十八）

生ける主が、みこころのままに新しい会堂を与え、完成して下さいました。私のような卑しい者を神は加えていただいて、生ける者の血で、神の栄光を仰ぎ見せていただきました。今は隠れて見えない箇所にも思い出が沢山ございますが、主からいただきました恵みの数々を覚えて感謝しております。工事中、設計変更が多々ありました。設計の吉本氏、施工の丸山氏、共にその都度気持ちよく応じて下さり、与えられた条件の中で最善をつくして会堂を完成して下さいました。群れの先生方、榎本先生ご夫妻そして多くの兄弟姉妹の篤いお祈りに、主が応えて下さり、神様がいつも共にいて、この会堂建築を祝福しお導

き下さいました。この大きなお恵みをいつも覚え感謝し、今日に至りました。設計の吉本様、施工の丸山様、大変ご苦勞様でした。有難うございました。

最後になりましたが篤いお祈りをいただきました、多くの兄弟姉妹に感謝致します。

そして、この会堂建築工事関係者御一同様の上に、主が豊かに報い祝福あらんことを信じ、終わらせていただきます。』

和也は博多の青柳和恵さんと、恵一は名古屋の吉岡麻衣子さんと、聖教は長崎出身福岡在住の高木京子さんと、泰子は広島出身横浜在住の澤野信さんと、それぞれ神様はよき伴侶を備え、新しい家庭を与えられ、孫七人となり、おじいちゃん、おばあちゃんの日々でした。

一九九六年初夏、主人は健康診断によって肝ガンが見つかり福大病院で入院手術を受けました。皆様の篤いお祈りをいただき、無事に退院致しました。すっかり元気にしていただいたと喜び、礼拝の他に、毎週月曜日の福岡朝禱会、信徒会、日本国際ギデオン協会福岡支部会員となり多くの学生さんへの聖書贈呈にも励んでいました。

一九九八年秋、再発し入院しながらも、主に生かされる日々

を感謝して出来る奉仕をしていました。

二〇〇〇年七月八日は、主人は入院中ですが、子供達が私達の結婚四二周年のお祝いに集まって、主人に「おめでとう。」「おめでとう。」「うん、ありがとう。」「と共に喜び、主に感謝しておりました夕刻、意識が薄れてゆく様子に、すぐ和義先生にお知らせし、祈っていただきました。聖書を読んでは賛美し、教会の長老兄弟もおいで下さり、皆でお祈りしました。私も子供達と孫も一人一人「おじいちゃん、有難う。」と声をかけますと、「うん、うん。」と頷いていましたが、眠りはじめました。「一寸落ち着かれましたから、お二人程残られ、他の方はお家でお休みください。また明朝おいでください。」と主治医の先生のおすすめで、和義先生方はお帰りになられ、恵一と私が残りました。

子供達が飯倉へ着くかつかないかの十分後位だったでしょうが、急に血圧が下がりが始め、すぐ呼んでくださいとの指示に、皆病室に集まりました。最後に和也が車を車庫に入れて病室に入り、「お父さん遅くなってゴメン。」と言うと同時に主治医の先生の「御臨終です。」それまで眠っていた主人の顔は、笑みを浮かべ、輝いてきました。あつ！今主人は、主にお会いし天国に迎え入れられた。主人は神様に、わたしの子よ、と喜び迎え入れられた、との思いに悲しさはなく、主人の顔ばかり見えて

ました。

榎本和義先生の司式のもと、榎本利三郎先生、百合子奥様を始め、本当に多くの先生、兄弟姉妹とお別れが出来、主人も喜び皆様にお礼を申し上げたと思います。

「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。」(ローマ八・二八)

主人が最後に病室で証してくれたみことばです。主を信じ委ねて御国へ旅立ったと思います。

また生前息子達に、特に兄弟仲良くと常々申しあげました。今五家族孫八人、それぞれの教会で礼拝の民に加えられ、生かされ、愛されている恵みを感謝しながら、私は私の心のうちに住んでくださっているイエス様を拝し、父なる神様を畏れ敬いお仕える日々でありたいと願っています。

「神は、とこしえにわが心の力、わが嗣業である。」(詩篇七三・二六)

「愛する御子によって賜わった栄光ある恵みを、わたしたちがほめたたえるためである。」(エペソ一・六)

## 姉の信仰と召天

正野 眞 宏 (前田)

姉は平成十二年七月二八日、平安の内に天に召された。六四歳の若さであった。あれから、早や十二年が経ったことに、歳の速さを思う。

姉は少女時代に肋膜炎を患ったこともあって、どちらかと言えば病弱の方で、特に呼吸器系が弱かった。

八幡前田教会で救われ、福岡の幼稚園の教師として働いていた時に結婚し、後に主人の転勤で鹿児島市に移った。そこで加治町教会という鹿児島県下の中心的な教会へ行くようになったが、八幡前田教会で養われた信仰とは異なり、伝道中心であったため、随分戦いがあったようであるが、徐々に姉の信仰が受け入れられるようになり、信仰上の悩みの相談を受けたり、婦人会でも中心的な働きをするようになった。また演劇が好きで、少女時代やっていたこともあって、視力障害者の朗読ボランティアもやっていたようである。

いつ頃からは不明だが、気管支拡張症という難病に罹り、しばらく自宅療養を続けていたが、家庭生活が困難になったため、



入院したことを義兄から聞いた。

私はできるだけお見舞いに行こうと思い、姉の様子をその都度弟達に報告していたので、その記録をもとに病氣と闘った姉の信仰と召天の様子を、概要であるが記したいと思う。

### 第一回見舞い（平成九年四月十二日）

この日初めて、入院中の姉を見舞うために、家内と車で鹿児島島の病院へ向かった。

久しぶりに会った印象は、思ったより痩せていること、そのためか、顔のしわと白髪が増え、歳を感じさせるが、それ以上に長い病氣との戦いが偲ばれ、胸が痛む。しかし、笑顔で語る姉の顔は以前と同じように若々しく、安心もし、うれしくも思った。姉の病状の概要は次のとおりである。

鼻には酸素吸入の管が入っている。生涯これは外せないそうだ。何しろ肺機能が低下して、人の四割しか働いていない。それはどういう事かと言えば、人間が生きていくうえで必要な酸素の四割しか取り込めない。それを補おうと心臓が必死にフル活動しているのです、いつ心臓が破裂するかわからない。とても生きてゆける状態ではないらしく、それは死を意味するものであった。酸素吸入してもやっと六割らしく、とにかく心臓に負担をかけないようにするほかない。だから退院しても、酸素吸

入は絶対に外せないし、炊事はおろか、買い物のための外出も、長話もいけない。とにかく体力を使わないよう、酸素不足を起ささないよう、ただひたすら、じっとしておくほかないのだ。姉はどうとう一級の身体障害者になってしまった。

以下、姉が私に話してくれた、神様とのやり取りである。

『医師が自分の病状を教えてくれ、もはや生きて行けない者となったことを知った時、死を意識せざるを得なかった。以来、死の恐怖が襲い掛かり、私は死ぬのかとうろたえた。』

「主よ、なぜ私が死ななければならないのですか。なぜこのような辛い中を通らねばならないのですか。私はあなたが見えません」と、必死で神に叫び祈った。

もはや、自分では何をすることも、どうする事もできなくなった中で、ただ主にすがるほかなく、生きるも死ぬるも、主に一切を委ねた時、お言葉があった。それはまるで、主が私の横にいて語ってくださっているように思えた。

「望みをいなく捕われ人よ、あなたの城に帰れ。わたしはきょうもなお告げて言う、必ず倍して、あなたをもとに戻すことを。」（ゼカリヤ九・十二）

私は主に任せたと思っていたが、自己中心の心があったこと、病氣の娘の事も自分で何とかしようという思いのため、自分が

苦しんでいたことを示された。主が全責任を持ってくださる。私の病氣も癒し、倍して返してくださる。娘の事も主に任せれば大丈夫という信仰が与えられ、私は勝利し、平安で一杯になった。』

このように話す姉の顔は、穏やかであった。主の約束に立ち、信仰を持った者の顔であった。私はヨブの事を思った。「忍び抜いた人たちはさいわいであると、わたしたちは思う。あなたがたはヨブの忍耐のことを聞いている。また、主が彼になさったことの結末を見て、主がいかに慈愛とあわれみに富んだかたであるかが、わかるはずである」。(ヤコブ五・十二)。

姉に対する神様のお取り扱いは、人間的に見れば、確かに厳しいように思える。しかし、神様は姉を愛してご自分を現し、神の栄光を示そうとなさっておられるのだ。

## 第二回見舞い (平成九年七月十九日)

篤き祈りにもかかわらず、状態は好転せず、かえって悪くなり、度重なる入院に姉はさぞかし失望落胆しているのではないかと危惧も、姉の顔をひと目見て安堵した。

暗い顔はどこにもない。にこやかな笑顔で迎えてくれた。体は弱々しく見えるが、いつもの明るい顔と同じである。信仰に

立っていることと、主の愛の中に支えられている様子は、話を聞かずとも分かる。

しかし、姉は話しながら、途中で息を整えようと何度も深呼吸をする。話すと、酸素が不足するらしい。やはりこちらが思うより、事態はよくないことを実感せざるを得ない。これでも、数日前からやっと話ができるようになったとの事である。以下は、姉の話の要約である。

『四月下旬に退院し、家ではヘルパー派遣を受け、身の回りの事は全部やってもらった。しかし、時間が午後の三時間であり、朝と昼の食事だけ自分がしてきたが、どうもそれすらも無理だったようだ。それにヘルパーさんと話すことも多く、お喋りも体力消耗となり、肺炎と心不全を起こして、緊急入院となった。肺機能がさらに低下して、現在は五十%しか働いていない。血中酸素も六十%に低下して、酸素吸入の酸素量も〇・五リットルから〇・七五リットルまで増やしている。この酸素量の調節は難しく、多すぎるとガスが増え、危ない事も多くなること。水を飲んだり、食事をする時も、呼吸を整えながら一口ずつゆっくりしなければならず、あまり時間をかけ過ぎると、食欲がなくなるとの事で、私達が何気なくやっている事が、どんなに感謝な事かと思わされる。』

入院する時、困った事が起きた。それは前回入院した時は、教会の方が来てくれて身の回りの事をしてくれたが、その方が来れなくなった。どうしようかと思っていた時、主人が心配しなくてもよいよ、神様が必ず備えてくださる、前回の入院の時もそうだった、娘の世話人も不思議なように与えられた、今度も大丈夫だよと言ってくれた。主人は教会には行っていないけれども、最近とても変わった。果たして、神様は素晴らしいサポーターを備えてくださった。以前来てくださったっていた方が、別な教会の方だけでも頼んでくれたらしい。その方は、刑務所を出所しても行き場のない人のための更正寮の寮母さんをしてる人で、とても気さくでよく世話ができ、寮生や寮を出た人からお母さんと慕われているらしい。この方が毎日のように来てくれて、清拭や買物などの用事をしてくれて、とても助かっている。何かお礼をと言っても、させてもらっていると行って、受け取ってもらえない。信仰的には、クリスチャンに失望したとかで、最近は教会に行っていないけれども、魂は神様を求めている。来る度に信仰の話をさせてもらっているが、喜んで聞いてくれる。私には神様が送ってくださった方としか思えないし、この方のためにも神様が備えてくださっているのかもしれない。

私は今回入院した時、天国が近いのかと思った。すぐに、駄

目、駄目、今サタンが働いているのだ、神様が私を癒してくださると約束してくださったのだから、神様を見上げようと、聖霊が教えてくださって信仰を持たせてもらった。今は神様の愛の中に守られている。

しかし、私も弱い者で、自分では何もできない状態なのに、いろんな事を心配することがある。まだおのれが生きている。私がどうこうではなく、全て主に委ねるほかないことを覚えて、十字架を仰ぎ望んでいる。兄弟の篤き祈りの支えと励ましの手紙がうれしい……。』とのことであつた。

私はひと言ひと言、噛み締めるように話す姉の話を聞きながら、肺機能は極端に低下し、その蘇生は不可能な状態でありながら、なお神を信じる者の力強さ、「神の力強い活動によって働く力が、わたしたち信じる者にとっていかに絶大なものであるか(エペソ一・十九)を思い、また、「彼自身のからだが生んだ状態であり、また、サラの胎が不妊であることを認めながらも、なお彼の信仰は弱らなかつた。彼は、神の約束を不信仰のゆえに疑うようなことはせず、かえって信仰によって強められ、栄光を神に帰し、神はその約束されたことを、また成就することができる」と確信した。(ローマ四・十九〜二十一)、アブラハムの信仰を教えられていた。

私達は主の前に共に祈り、再び会いに来ることを約して、病室を後にした。

### 第三回見舞い（平成十年二月二八日）

先日、義兄から姉の状態が悪くなつてICUに入ったので、顔を見せて欲しいとの連絡を受けた。風邪を引いたのが原因で、呼吸機能が落ち、肺に水と炭酸ガスが溜まつて肺炎を起こし、心不全、呼吸不全となつたらしい。

ICUは面会時間が十二時三十分から十三時までと決められているので、しばらく待合室で待つ。扉の向こう側は死と隣り合わせの人達がいると思うと、やや緊張する。

時間となつたので入室する。静かだ。ホールのような広い部屋に六人ばかりの患者がいるが、話し声もなく、人がいるのか分からないぐらい、人の息吹がまるで感ぜられない。ここには何の慰めとなるものはなく、無機質な部屋は医療器械ばかりが目につく。

姉は、部屋の中央部にいた。姉も私達を認めて、驚いたように笑顔を返してくれたが、その表情は弱々しく、状態がよくないことを直感する。鼻には酸素吸入と鼻腔栄養の管が差し込まれ、胸や手にも数本の線が繋がれている。痛々しい姿である。呼吸困難だけでなく、食事の楽しみさえも奪われた毎日、どん

なに辛い事だろうと、心を痛める。

加えて、咽喉に管を通されているので、話すことができない。自分の意思を伝えられない辛さ、孤独感は、当人しか分からないと思う。毎日顔を見せる主人とのわずかな時間の会話だけが慰めなのだろう。他の患者とは違い、意識がはっきりしているだけに、その辛さも倍加するのではないだろうか。

以下は、姉が私の手の平にカタカナで書いた、わずかな会話の記録である。

一 「タンガ ツマツテ クルシム。ソノトキ カンシャシテイル」。

自力では痰を吐き出せないほど、体力が落ちているということか。しばらくして、苦しうに身をよじるので、看護婦さんに来てもらい、強制的に排出したが、身の痛む思いだった。そのような中でも、感謝しているとは！

二 「アルトキ、タンガツマツテ コキユウガデキズ、イシキガナクナツタ。ワタシハ テンゴクラ ミテイタ。フトメガサメルト、ベッドノウエダツタノデ、ガツカリシタ」。

私は確認したくて、「天国を見せてもらったの」と聞くと、うれしそうにうなずく。姉は第三の天に引き上げられ、すばらしい経験をさせてもらったのだ。

三 「しばらくして、「心は平安ですか」と聞くと、「シユハ ワタシノ スベテ」と書いた。このような厳しい状態の中で、主が姉と共にいてくださり、姉をしつかり握っていてくださっていることを知った私は、そのすばらしさと感謝のゆえに、涙が溢れ出て仕方がなかった。

四 「トキドキ シツボウスル。ソノトキ『トラワレビトヨ』ノ コエガ キコエル」。

私は意味がよく分からなかったので、「病に捕らわれている人よ、心配するなという意味？」と聞くと、やや不満顔でうなづく。大体そのようなことらしいとは思ったが、私も釈然としなかった。帰ってから、思い出した。

「望みをいだけ捕われ人よ、あなたの城に帰れ。わたしはきょうもなお告げて言う、必ず倍して、あなたをもとに戻すことを。」(ゼカリヤ九・十二)である。

姉は、単に主が共にいてくださることを感謝しているだけではなかった。主が必ず約束を成就してくださることを待ち望んでいるのだ。私は姉の状態を見て、これではとても無理だろう、主は姉を召されるかもしれないと思っていたのが、恥ずかしくなった。

姉は「死人を生かし、無から有を呼び出される神を信じた」ア

ブラハムの信仰を持って待ち望んでいる。主もまた、約束の確かなことを、聖霊をもって確認しておられるのだ。私も見えるところによらず、神の御言を信じる信仰に立って、祈り続けなければならぬことを、深く教えられた。



昭和 54 年鹿児島市城山にて姉夫婦と

#### 第四回見舞い(平成十年四月二〜三日)

先日から自力呼吸の訓練をしているが、酸素供給量の調節が難しく、酸素不足から脳の働きが悪くなり、意味不明の言葉や

勝手に酸素のパイプを抜き取るという事態が起こったため、急遽ICUに入った。(以下省略)

### 第五回見舞い (平成十年四月八〜九日)

先週ICUに入った姉の状態は、ほとんど変わらない。否むしろ、全体症状は悪くなっているのではとさえ思われる。精神安定剤でほとんど眠っている状態なので、その眼は腫れぼったく、生気が感ぜられない。脈拍数は一二〇〜一三〇、人が走っている時の脈拍である。口から栄養が取れず、体力の低下は否めない状態の中で、二四時間走り続ける心臓は大丈夫だろうか。口には酸素のパイプが差し込まれているので、物が言えず、以前は指で私の手の平に書いていたが、その力もなくなっていた。姉は何かを訴えているが、私には分からない。思いが伝えられない苦しみ、どんなに辛いことだろう。

漸く、「アツイ」と手に書いた。自らタオルケットを除ける力もないのだ。体はおろか、自分の手すら動かす力もないのである。あのような状態でよく生きている、それだけでも奇跡だとは、主治医の述懐だそうである。主が永遠の腕をもって支えてくださるのだ。

喉が渇くようだ。十字架上の主は、「我、渇く」と言われた。その御苦痛も、かくやありなん。誰がその渇きに耐え得ようか。

看護婦さんに頼んで小さな氷を含ませてもらった。姉はそれをいとおしむようにして飲んだ。それはどんな山海のご馳走にも勝るものではなかったか。

私は姉の厳しい状態を見て、自らの信仰の弱さを思い知らされていた。人間的には、その回復は不可能である。しかし、神は不可能を可能とすることができるとある。故に、失望せずに祈り続けなければならないと、これまで祈ってきた。

私は、「生きるも、死ぬるも主の手に委ねよう」と語りかけたが、姉は少し顔を曇らせたように見えた。

それで翌朝、私はその事を姉に確かめると、大きくうなずいた。このような状態の中でも、姉の信仰は弱ってはいない。私は驚いた。考えてみると、私の方が状態を見て信仰が持てないため、「主のみこころのままに」と言っているのかもしれない。

それはゲッセマネの園におけるイエス様の祈り(神に対する全幅の信頼と絶対服従の態度から出た祈り)とは異なるものである。姉は逃げないで、神様と真正面から格闘している。神様が姉に約束されたゼカリヤ九章十二節「望みをいだく捕われ人よ、あなたの城に帰れ。わたしはききょうもなお告げて言う、必ず倍してもとに返すことを。」の御言をすっかり抱いて、待ち望んでいるのだ。あの苦しい中で、不信仰に陥り、不安になる時

もあるだろう。その都度、御霊が約束を思い起こさせ、間違いないことを確認しているのだ。これは神様と姉との契約の問題である。姉がそのような信仰に立っているならば、私達は心を合わせて、祈りの援護をしなければならない。

#### 第六回見舞い（平成十年四月十三〜十四日）

姉の状態は依然として思わしくなく、何をしてあげられることもできず、人と会うだけで体力を消耗するようなので、ただ行くだけでは気が重くなる。私は何のために行くのだろうと、ふと考える。ただ肉親として顔を見せるだけではあまり意味はない。それは、度々来てもらって申し訳ない、という重荷を負わせるだけかもしれない。

私は何を持って行けばよいのだろう。姉は今、霊肉共に戦いの中にある。姉が求めているのは、信仰の言葉と祈りであり、もっと高い次元の信仰を待ち望んでいるに違いない。とすれば、私はどの御言を持って行けばよいのだろう。主は私を用いて、姉に必要な御言を与えてくださるであろうか。

ありのまま、「信なき我を憐れみ給え」と祈るほかない。姉が与えられたゼカリヤ書九章十二節の御言を握って、主によりすがほかない。五つのパンと二匹の魚の信仰しかないが、「それをここに持つてきなさい」と言われる主の所に持つて行き、祝福

していただくほかない。

義兄に会った時の話として、主治医から、口から強制的酸素吸入をこれ以上続けると別な障害が出るので、喉に穴を開けてそこから酸素の管を差し込むようにすれば、本人も楽になるし、会話も少しでき、口から食事を取れるようになるからと手術を勧められたとの事であった。義兄としては、できれば手術をしたいが、以前同じような話があった時、家内は体にメスを入れることを嫌っていたことがあり、躊躇している、どうしようかと聞かれたので、私は「率直に姉に話してみましよう。姉が受け入れれば神様の御心と信じて手術をする。嫌だと言えば御心ではないので止めることにしてはどうですか」と答えると同意してくれ、近々話すことになった。

次の日、お世話になっている加治町教会にK牧師を訪ね、お礼方々懇談の時を持った。そこで姉の愛歌が讚美歌二七〇番と五三二番であることを知り、午後姉の所に行った時にこれを歌った。姉も歌っているように思えた。そして聖書を読み、祈って別れを告げた。

#### 第七回見舞い（平成十年四月二四〜二五日）

四月四度目の訪問である。その日は天気が悪く、案の定、特急は大幅に遅れ、ICU面会は五分だけだった。そこで今晚、

近くのホテルに泊まることにした。

私としては、姉と今夜と明日会う約束したこともあるが、この機会に腰をすえて神様に祈りたいという願いがあつた。ホテルの窓カーテンを開けると、目の前に姉の病院が立ちほだかるようにして建っていた。あの八階のICUに姉が寝ている。私は窓を開けたまま、神様の答えが受けられるまで祈ろうと祈り出した。

そして与えられた御言は、「主は言われる、わたしがあなたがたに対していただいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである」(エレミヤ二九・十一)であつた。

### 第八回見舞い(平成十年五月七〜八日)

姉の喉の手術は四月三十日に無事終わって、経過は良好と聞いている。その後の状態を把握するために、期待を持って行つたが、姉に会つて見て、驚いてしまった。十日前の姉とは全く違うではないか。生氣を取り戻した姉がそこに居た。以前は笑顔もなく、その目は虚ろで、手一つ動かす力もなかったが、今は笑顔で私を迎え、手も少しだが動かしている。喉に穴を開けられ、酸素パイプが差し込まれている姿は痛々しく、声を出し

て話すことはできない状態は変わらないが、こちらが語ることに、昔の姉そのままに表情豊かに反応してくれる。そして、「ありがとう」と言う。とても十日前の姉と同じ姉とは思えないほどの、変わりようである。

看護婦さんが、明日から口から食事を取りますとのこと。あの厳しい病状の中で、誰がこの日を想像し得たであろうか。主が祈りに答えてくださったのだ。私は感謝に溢れて、涙が出そうであつた。

翌朝八時、朝の面会時間は、私一人であつた。それでゆっくり話すことができた。姉は自分からしゃべることはできないが、ニコニコしながら聞いている。

昨晚、お姉さんに会つてから、義兄から夕食をご馳走になつたこと。そこで姉のいろんな話から主治医と患者の信頼関係が治療を進める上で最も大事であり、この点が恵まれたとの話があつたので、私が「それと同じように、神様と私達も信頼関係が一番大事ですね。」と言うと、義兄は「そのとおり、私達は神様を信じなければならぬ。」と言つてくれたよ、義兄は神様を信じているのだね、神様は間違いなく、義兄を捕らえてくださっているんだねと言うと、うれしそうにうなずいていた。その顔は、夫の救いについてはすでに確信が与えられているかのような顔だつた。



もう一つ話したことは、私自身教えられたことであるが、姉

が寝たきりで何もできず、多くの人に世話をしてもらう身であるけれども、ただ主に信頼しているだけで、実に大きな神様の御用をしている、私自身、姉を見舞うことで自分の信仰が探られ、どれだけ整えられたか分からない。私だけでなく、義兄についても、世話をしてくださる教会の方もそれぞれ神様の前に立ち、大きな恵みを受けているか分からない、元氣な私がどんなに走り回り、立派な説教をしたとしても、こんな大きな働きはできない、神様はお姉さんを通して、多くの御業を行ってくださっているのだね、私は神様の栄光を現すとはどういうことかを、学んだような気がする、それは私が何かをするのではなく、ただ神の大能の下に自らを低くして、導きのままに従うことなんだね、と言うと、大きくうなずいた。

帰る時間になって、今から朝食とのことで、ぜひ一口でも食べるのを見たいと思ひ、そのまま残らせてもらった。まずヨーグルトを握らせてもらひ、上手に一口食べた。その味が口中に広がったのか、姉は何とも言えないうれしい顔をして、「美味しい！」と言った。何しろ四十日ぶりに、口から食事をするのである。それは姉にとつても、私にとつても、感動的な一瞬だった。私は「よかったねえ。よかったねえ。」と言うばかりだった。そして、このようにまでしてくださった神様に、感謝する

のだった。

### 第九回見舞い（平成十年五月二十日〜二日）

いつもの通りICUへ行つて見て、少し様子が違う。どうも姉はここにはいないような気がしてならない。それで一階の受付へ引き返し、姉の所在を聞いたところ、六階の個室へ移つたとのこと。ヤッター！姉はさらに好転しているのだ。そう思うと、早く顔を見たくなった。

病室へ行つてみると、ちょうど食事中で、ベッドを起こし座つたまま、S姉から食べさせてもらつていた。姉は私を見て、ニコツと笑つた。まだ体力が十分ではなく、いかにも弱々しい状態ではあるが、その顔には以前にはない生気があつた。

一緒にいたY姉が「全部食べましたよ。」と言うので、びつくりした。こんなにまで食欲が与えられているとは、「美味しい？」との問いに、笑顔でうなずく。

いつからここに移つたのですかと聞くと、先週の土曜日にICU全室の消毒があり、一時的に一般病室へ移つたが、姉の状態が安定して良いので、テスト的にそのままいるとのことだった。「リハビリも始まったのよ。」と言うので、驚いて聞いてみると、今までの酸素吸入の太いパイプから細いパイプに切り替え、自力呼吸の練習をしているとのことである。これは極めて

危険を伴うもので、もし酸素不足を起せば、脳などに影響が出るため、体力に合わせて徐々にやらねばならない。果たして、姉がこれに耐えられるか。「苦しい？」と聞くと、「少し。」と言う。

喉に穴を開けているので話すことができないが、唇の動きで、かなりの事を読み取ることが出来る。「つらい事は？」と聞くと、やはりしゃべることができないことらしい。してもらいたい事や話したい事は山ほどあるだろうが、それができない辛さは本人しか分からない。ただ弱さを思いやることのできる主だけが、届くことができる。

ひと通りの世話が終わったので、三人で食事に行きましょうということになった。私は食事が終わったらまた来る、と約して部屋を出た。S姉とY姉、それに今日はいないがF姉の三人は、実の姉妹以上の気持で、毎日世話をしてくれる。姉も信頼して、身を任せている。しかも、それぞれ別な教会の人なのである。世に絆の強いものに地縁、血縁があるが、それとは別に「信縁」又は「神縁」とでも言おうか、主にある兄弟姉妹の関係は、それ以上の強い絆で結ばれていると思う。恵み深い主は、こういう所にまで届いて、三人の方を備えてくださったのだ。

(私は以前、お礼の手紙を出した時、「神様がカラスを用いてエリヤにパンを運ばせたように、皆さんはパンならぬ愛を運ん

でくださっているように思えます。」と書いた事がある。)

誰一人恩着せがましいことを言わず、させていただいていると言う。きっと神様がそれぞれに報いてくださっているに違いない。とは言え、私としては感謝と共に申し訳ない気持もあり、この機会に夕食をご馳走したいと思っていた。ところが、Y姉がどうしても自分が払うといって聞かない。気の弱い私は、とうとう彼女に負けてしまい、またまた「愛の負債」を負ってしまった。これらの愛のゆえに、主が豊かに恵んでくださるように。

話が弾んだので、ついつい遅くなってしまい、姉の所に行ったのは、病院の玄関が閉まる九時だった。姉はまだ起きていた(夜は太いパイプになっていた)。そこで食事の事を話し、聖書を持ってくるのを忘れたため、これまで導かれた御言を語り、姉の愛歌を歌うと、姉は口を動かして歌っていた。

#### 第十回見舞い(平成十年五月三十日)

数日前から昼間だけ、付添婦さんを雇っているという。それは、まだ病状が安定しておらず、ICUのように看護婦さんの世話が届かないこと、世話してくれている教会の方々も都合で来れないこともあり、確実に来てくれる人が欲しいとのこと、頼んだそうである。

姉はベッドの上に上体を起こし、その付添婦さんに食べさせ

てもらっていた。まだ自力で食べるまでの体力はない。食事は柔らかい粥であるが、八割方は食べるとかで、感謝である。そのためか、以前よりは少し頬がふくらしてきたのではないかと思わせられる。

しかしすぐ疲れるらしく、食事の後も横になって眠るとのこと。従って、人と会っても長くはできない。身体状態も依然予断を許さず、昨日も自力呼吸で酸素不足を起こし、容態が悪くなったらしい。自力呼吸の訓練は、姉の体力ギリギリの所でやっておろ、危険を伴うのである。「酸素不足を起こした時の苦しみは、地獄の苦しみ」と、以前に姉は表現したとか。

リハビリとしては、この自力呼吸のほかに、ベッドから離れて歩けることを目指して、手や足の関節を動かす床上リハビリが始まったとのことである。

このように、治療的には着々と進んでいるように見える。それはそれで方向が見えて感謝なことであるが、必ずしも姉の回復は目に見えるようにはなっていない。

思うように回復しないという思いが、姉にあるのかもしれない。それで、私は姉に聞いてみた、「ここまで良くなって感謝だけれど、なかなか思うように良くなるらないことで、信仰が持たなくなることはない？」。すると、姉は素直に、「しよっちゅう。」と声の出ない口で言い表した。

私はこの言葉を聞いた時、姉が不信仰に陥っているとは思わなかった。主の愛から離れているとは考えられない。それは自分、神様と姉との約束の問題（ゼカリヤ九・十二）ではなからうか。姉も人の子、弱い肉体を持っているのである。きつい時はきつい、痛い時は痛い、それでよいではないか。祈っても結果が出てこない、神様どうですか、約束はどうなっていますかと思う。それも良いではないか。信仰者ぶることはない。神様の前には、何一つ繕うことはない。ありのままてよいではないか。私達は肉体を持つている以上、これから逃れることはできない。しかも自分ではどうすることもできないのだ。主はこの事で、「もつとしつかりせい。」と、責められるだろうか。弱さに届くことのできる主が、何か大きな御心のゆえに、この中を通しておられるに違いない。信仰一つ、自分の力ではできない。御霊が助けてくださらなければ、神を信じることもできない弱い者なのだ。

姉は、我々と同じ弱さを持ち、その中で必死で主に信頼しようとしている。厳しい信仰の戦いの中で、自らの弱さを感じ、それを率直に言い表した言葉のように思えた。私には皆さんが思っているような信仰を持っているわけではない、私には何も無い、ただ主の憐れみに寄りすがらだけだと、言いたかったのかもかもしれない。

我々には、祈る体力も気力も与えられている。しかも聖書を讀み、集会にも近づくことができる。しかし、姉はそれらを奪われた中にいる。私はもう一度、姉が身体的にも靈的にも厳しい中に置かれていることを思わされ、もっと祈りの応援をしなければならぬと思った。

私はもう少し姉の靈状を知りたいと思ったが、姉は「疲れた」と言つて、申し訳なさそうに眼をつぶつた。姉と会つて、わずかに二十分足らずである。人の話を聞くだけでも、相当のエネルギーと氣力を要する作業なのだ。これ以上の長居はできない。私達は姉の愛歌を賛美し、祈つて別れを告げた。

### 第十一回見舞い（平成十年六月二十日）

一週間前、義兄に電話したところでは、特に変わりはなく、検査データも安定しているとの事であつたので、以前よりも体力が付いて元氣な表情が見られるのではないかと期待していたが、会つてみるとそうではなかつた。以前よりも生氣が感ぜられないのだ。

付添婦さんに状態を聞く。昨日は氣分が悪かつたが、今日はいくらか持ち直したこと、食欲があまりなく、半分くらいしか食べないこと、床上市リハビリは続けているが、疲れるとのこと。そう言いながら、姉の足をさすつていた。姉の状態は、前とほ

とんど変わつていないのだ。姉に「喉の管が小さくなって、どう？」と聞くと、「苦しい。」と言う。

私は姉の表情を見て、体の事よりも、信仰の事が心配になつてきた。姉は、今日まですばらしい信仰を持つて主の前に歩んできた。私も姉の信仰から多くを学ばせてもらった。しかし、前回訪問の時、不安になることが「しよつちゅう。」と言つていたように、長引く試みの中で、信仰が震われてきているのかもしれない。

それで私は率直に、「信仰が持てなくなることがあるの？」と聞くと、悲しそうな表情をしてうなずく。私は「さもありなん。」と思つた。ヨブの試みにも似て、神様の長く厳しいお取り扱いの中で、何か御心があつての事とは思つたが、祈りになかなか答えてもらえない苦しさ。この狭い病室で何の刺激もなく、ただ天井を見て暮らす毎日。聖書を読むこともできない。体力もなの中で思考力も衰える。祈る力も、氣力もなくなるのではないだろうか。それは姉しか分らないことである。信仰が落ちたからと言つて、誰が姉を責めることができるだろうか。私は思いつくままに、二つの事を語つた。

一つは、お姉さんは信仰が持てないと悲しむことはないと思つた。私達はおもともと自分で信仰を持つことすらできない弱い者で、イエス様はその事を良くご存知である。それはこちらの信

仰如何ではなく、イエス様の信仰によって守られ、導かれていたのであって、その事を認めるほかない。しかも、それが本当の信仰ではないだろうか。つまり、自分で何かをしようと思っても、私のできる事は何もない。自分の信仰も、自分の病氣も将来も全部、ただ神様のお取り扱いに身を委ねるほか、私達のできる事はないと思う。

もう一つは、私達の信じる神様がどんなに偉大な方であるか、案外分かっていなかったことを、最近マルコ四・四一で教えられた。弟子達は嵐を一言で鎮めた力を見てびっくりしたが、神様は我々の理性をはるかに超えた方であることを忘れていた。何十億人の中の私一人、神様はそんなに気が回らないだろうと考えたりするが(姉がうなずく)、私達の頭の毛までも数え知っておられ、なおかつ愛しておられる方である。イエス様は不特定多数、十把ひとからげで十字架にかかられたのではなく、信じがたいことではあるが、一人一人、お姉さんを心に覚えて死んでくださったと信じる。この方が偉大だから、その血は私達の罪を清めて余りがある。この方が偉大だから、約束を成就することが出来る。この方が偉大だから、お姉さんを目こぼしするはずがない。私達はこの方を信じるほかないと思う。そのように話すと、姉の表情は明るくなり、「ありがとう。」と言った。私達は姉のために少しでも役に立ったのかと思うと、

うれしかった。

帰りの電車の中で、もう一度姉のことを思った。誰か、姉の所に御言を運んで上げる人はいないか。体の治療や世話も大事だが、姉に今必要なのは、神の言葉である。主よ、どうぞその方を備えてください。

誰か一日でも良い、聖書を読んであげる人はいないだろうか。そうだ、付添婦さんがいる。神様をまったく知らない人だけど、今度行った時に頼んでみよう。そして、姉の好きな讃美歌を大きな紙に書いて、持って行こう。付添婦さんに掲げてもらえれば、姉は歌うことができる。そう思うと、早くそうしてあげたくなった。

願わくは、主がこの事を導き、祝福してくださるように。

## 第十二回見舞い(平成十年七月五日)

病室に入ると、姉は付添婦さんに足を摩って貰っていた。私達を見つけ、驚いたような表情を見せた。

付添婦さんに姉の状態を聞く。最近暑さのせいもあって食欲はあまりないが、一生懸命食べていること、リハビリは続けているが、まだ立ち上がる体力がないとのこと。姉に「呼吸はどう?」と聞くと、「苦しい。」と、声にならない口の動きで言う。姉の体力ギリギリの所まで酸素を絞り、それに慣れるように訓

練しているわけである。私は姉のつらそうな顔を見ると、そんなにまでしてやらなければならないのかと、可哀想になる。「先生に言つて、酸素を増やしてもらおうか。」と聞くと、首を振りながら「いい。」と言う。姉は苦しさに耐えながら、チャレンジしているのだ。

姉が続けて何かを言っているので、耳を傾け、口の動きを注視してそれを知ろうとしたが、分からない。すると、付添婦さんが紙とマジックペンを持たせたので、それに書いてもらったところ、「苦しさを紛らわすために、足を摩つて貰っている。」とのことであつた。私は、てっきりリハビリの疲れを癒すために行っているのかと思つていたが、今さらながら姉の呼吸の苦しさをいかにかりかを、思い知らされた。

その間にも、何度か痰を詰まらせる。痰が詰まると呼吸が苦しくなるので、その都度、看護婦を呼んで取ってもらつている。喉にあけた穴に細いパイプを気管の奥深くまで差し込んで痰を吸い取るのだが、その時、姉は辛そうに顔をしかめる。姉の左手には、看護婦詰所に通じる緊急通報のスイッチが握られていた。姉は呼吸の苦しさをほかに、痰との戦いがあるのだ。

家内が姉の細い腕を取つて脈拍を測る。その速さに驚いていた。後で聞いたが、多分一分間に一二〇は打つているとのことである。相変わらず、姉の心臓は全力疾走している。肺機能が

回復しない限り、心臓に負担がかかり、その心臓がいつまで持つか分からない状態なのである。

しかし、不思議なように守られている。あの二月から四月にかけてICUに入り、実に危険な状態にあつたが、その中から守られ、今の状態は決してよいとは言えないながらも、支えられている。飛行機で言えば、いつ落ちるか分からないギリギリの低空飛行を、もう数ヶ月も続けている。とは言え、姉の苦しさと戦いは、並大抵ではない。しかも、いつ果てるとも知れない戦いなのだ。姉の信仰が震われているのではないかと心配する。

そこで聖書を読むので何処がいいかと尋ねると、「ゼカリヤ書」と言う。そうだ、姉が主から与えられた約束の御言だ。私は姉の聖書を取り出した。その聖書はまだ新しかったが、至る所に赤線が引いてあつて、よく読み込んでいるのが分かつた。私は読む箇所を開き、一言一言噛み締めるように、ゆっくり読んだ。「望みをいさぐ捕らわれ人よ、あなたの城に帰れ。わたしはきょうもなお告げて言う、必ず倍して、あなたをもとに返すことを」(九・十二)

姉はこのような状態の中で、なおこの御言を足場にして、主を待ち望んでいる。そうであれば、私達もこの御言を持つて主に願つて行こう、そう思った。

長居はできないので、「また来るからね」と言つて別れを告げると、「もう来なくていい」と言う。多分、遠い所を度々来てもらうのは気の毒という思いと、自分は主にあつて大丈夫だからという思いがあつてのことであろう。「主の御用と思つて来ているから、心配しなくてもいいよ。」とは言つたものの、よく考えてみると、以前のような危険な状態は脱しており、悪いながらも支えられているので、後はこちらで祈ることと御言を届けることができれば、そう再々来ることもない。御言は手紙でも届けることができるわけだ。それに、主が姉について「幸いな計画」(エレミヤ二九・十一)を持つておられるのは間違いない事であるから、それを待ち望んでおればよいわけである。そこで、「じや、これからできるだけ手紙を書くことにする。そして、また必要な時に来ることにしよう」と言つと、うれしそうにならずにいた。お互いが主に信頼して、人を頼りにしない関係は、実に簡単で気持のよいものである。

そういうわけで、私の鹿児島行き御用は、ひとまず終わったように思う。後はこちらで姉のために祈り、できるだけ手紙を書く御用をさせていただくことにしたい。

## 姉の召天

(七月五日以後、私は折に触れて、近況報告に併せて聖書を

通して教えられたことを手紙に書いて出していたが、それから二年後、遂に神様の時が来て、召天を迎えることとなった。) 平成十二年七月二六日(水)、義兄から電話が入り、姉が重体となつたとのことで、急遽、車で家内と鹿児島へ向かう。夜十時に到着、すでに隆士が来ていた。ベッドの姉を見ると、すでに顔色なく、死相さえ見え、これはもはや終りの時であることを悟る。

その夜は、その後駆けつけた暢之と共に兄弟三人で付き添うことにする。人工呼吸器をつけた姉は、悪いなりに生き続ける。意識はあるのかないのか分からない。讚美歌を歌い、祈り、聖書を読む時、かすかに反応しているように思える。血圧は六十から一〇〇の間を上下する。血液が行かないため、腎臓が機能しなくなつて尿が出ない。また、腸がねじれて上にせり上がり、ガスもたまつて腹部が膨れる。そのため痛みが激しく、モルヒネを打つているとのこと。表情は穏やかである。この日は一睡もできなかった。

二七日(木) 状態は変わらず、悪いなりに安定しているように思える。東京から駆けつけた長男一家が姉と面会。

今夜は手分けして付き添うことにし、私達夫婦は午前二時か

ら六時まで担当することになり、近くのホテルに宿泊。

夜明けの二時に隆士、暢之と交代。前日、榎本先生に電話した時、できるだけ賛美と祈りをするようにと言われていたので、家内と二人で賛美を続ける。四時だったか、家内が仮眠するために部屋を出た後は、私一人でイエス様のご生涯(生涯、苦難、復活、召天の一連の歌を歌い、その歌詞をもって姉に語りかけていた。主が十字架にかかってくださって感謝だね、主が私達のために甦られたのだね……と語っている内に、主の御愛が迫って涙する。

家内が戻って来てすぐの五時十分、看護婦が「容態が悪化した。」と駆け込んできた。

その時はまだ召されるとは考えなかったが、とりあえず義兄と隆士達に連絡してすぐ来るように伝えた。

部屋に帰ると医師が来ていたが、すでに呼吸が止まっていた。家内に聞くと、ローソクの灯がスースと消えるように、静かに息を引き取ったという。穏やかな表情であった。

義兄達が駆け付けた時は、人工呼吸器は外されていた。義兄は穏やかな表情を見て、安心したようである。

私は、姉の信仰をもう一度思った。姉はゼカリヤ書九章十二節の御言を握ってひたすら待ち望んできた。しかし、結果は癒されることなく、召されてしまった。神の約束はどうなったの

か。姉は悲しんで天に召されたのか。

いやいや、そうではない。「これらの人はみな、信仰をいだけて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び、そして、地上では旅人であり寄留者であることを、自ら言いあらわした」(ヘブル十一・十三)とあるように、主は姉の信仰を受け入れ、天においてその約束を成就し、「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。」(黙示録二一・三〜四)世界へ移してくださり、倍した恵みを注いでくださっているのだ。私はそう思っ、主に感謝した。

**前夜式** この日の夜七時から、加治町教会で前夜式が持たれ、

二〇〇人近い人達が参列した。

**告別式** 翌二八日(金)午前十時三十分から、告別式が執り行われ、三〇〇人を超える人が参列してくださった。祭壇には花で囲まれた姉の写真があった。

司式してくださったK牧師から、生前の姉の信仰と教会での奉仕が語られ、改めて、姉が教会でよき働きをし、多くの方に愛されていたかを偲ぶことができた。私が親族を代表して挨拶



を行い、姉の思い出と病床での信仰を語った。

正午に出棺。火葬場に赴き、火葬にふす。わずかに残った遺骨に、人のはかなさと不思議さを思う。

弟の弘己がわが家の「一粒の麦」となったように、姉も松崎家の「一粒の麦」と成してくださるに違いないと、主にあつて願っている。



## 信仰告白

植木賢一郎(前田)

私は、母がクリスチャンの家に生まれ、幼い頃から教会学校に通っていましたが、高校生の頃、患難があり、神様のことが信じられなくなっていました。その後、母の勧めや生活の虚しさがあつて、大学四年生、社会人二年目の頃、教会に足を運ぶことがありましたが、信じることができず、足が遠のいてしまいました。

そして社会人四年目の頃、「こんな生活を何十年も続けて一体何の意味があるのか」と虚しくて仕方がなくなり、当時住んでいた東京多摩地方の教会をいくつか訪ね歩くようになりました。ある牧師が、「聖書にかけて生きてきた。」と確信あり気になんかのを聞いて、「そう言えば、子どもの頃は聖書の話聞くだけで、書いてあることを実行していなかった。生きていても虚しいだけだし、私もこの本にかけて、実行してみよう。」と思い、実行し続けました。

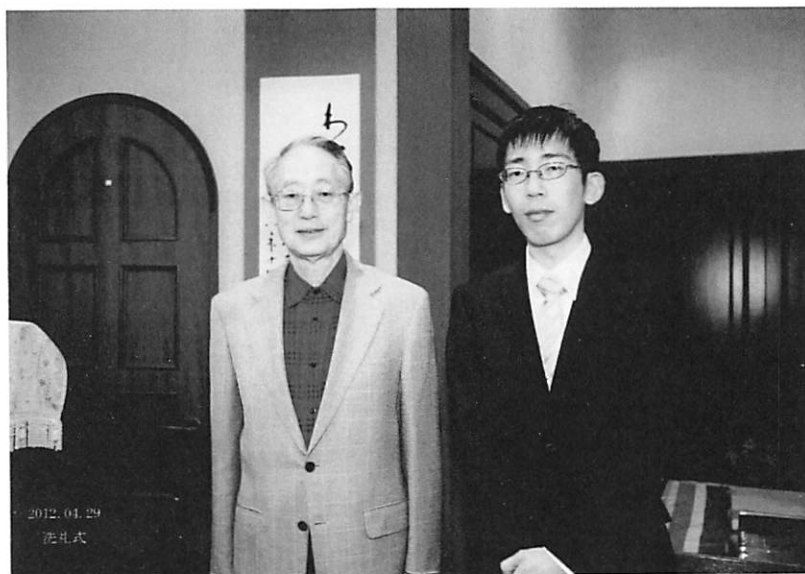
すると、実行すればするほど、自分の罪が見えてきて、平成二三年九月十六日の夜にはつきりと分かりました。「私はこれま

で正しくなかったし、これから先も正しくなることはない。私は滅ぶ。」と。九月十七日から十九日まで三連休だったのですが、悲しくて苦しくて泣いて過ごしました。どうこうしたところでどうしようもありません。正しくなれないって分かつちやいまましたから。当時軽い精神不安を罹っていましたが、そんな次元の苦しみではありません。二十日、休みが明けても苦しみは続きました。仕事もまるで捗りません。食事もほとんど喉を通りません。夜、帰宅して教会でよく言われる「罪を告白しなさい。」という教えを思い出しました。藁にもすがる気持ちで、自分の罪を言い表し、赦しを求め、祈りました。

数秒後、胸のあたりからジワジワと力が込み上げてきました。そして心に力が満ち溢れました。生まれて初めての感覚でした。さつきまで泣いていたのに、打って変わって喜びに沸いているのです。その時、神様が本当にいらっしゃるということを確信しました。

それからも信仰体験は沢山ありましたが、それはまた次の機会に証ししたいと思います。

そういうわけで、この度、洗礼に導かれました。私は信仰の訓練を走り抜こうと思います。神様の御恵みと皆さんのお祈りに心から感謝いたします。



2012年4月29日 洗礼式の日、榎本牧師と共に

## 受洗のあかし

原 田 日 登 美 (大濠)

今日にいたるまで、とても長い道のりでした。私が知らない間に神様は、私を愛し、導いてくださっていました。それを思うと、熱いものが込み上げ、感謝せずにはいられなくなります。私の子供時代、父の健康や様々な問題の為、家の中はいつも重苦しく、緊張していました。そんな中でしたが、中学生の時、ふとしたきっかけで、前田教会の教会学校に通うようになりました。当時教会学校の教師をされていた正野悠子先生と出会いました。初めての讚美歌と聖書、そして先生のお話はとても新鮮で心の支えになりました。

高校一年の時、些細な事で父からひどく叱られ、ショックで家を飛び出してしまいました。しばらく公園等をうろうろしましたが、夜になって行くところがなく、前田教会の悠子先生を訪ねて行きました。先生は涙を流しながら祈り、母に連絡してくださいました。その時の事を私は今も忘れることができません。でもそのことが恥ずかしく、また教会に通っても私の環境は良くならないし、面倒だと思ふようになりました。そして私

は神様から離れてしまいました。

進学と就職、そして結婚と、私は平凡に生きてきました。夫の仕事の都合で全国あちこちを転々とした時期もありました。その中で時々聖書の御言葉を思い出し、教会に行ったこともあります。でも、神様を信じるとはどういうことなのか、信じたいけど、どうしたらいいのか分からず、また離れてしまおうという繰り返しでした。

そんな私ですが、神様は決してお見捨てにはなりませんでした。今思い返せば、人間にはとても計り知ることができないお導きがあったと私は確信できます。

私は夫と二人の息子を持つ平凡な主婦です。悩みや不安はありましたが、ぶつぶつ言いながらも、それなりに幸せに生きていけるのだと何となく思っていました。でも、私の考えは甘かったようです。十二、三年前、私の人生の中で一番大きな試練を体験しました。想像もしなかった出来事が複雑に絡み合うようにふりかかり、私は人と関わるのが嫌になりました。ひどい自己嫌悪も感じ、心療内科に通いながら、やっと自分を支えました。目に見える不安は、やがて解決しましたが、心の問題は消えることはありませんでした。何年たっても人と話すのが嫌で、絶望的になったりもしました。生きるのも嫌で食事を極端に減らし、ひどく痩せたりもし、家族と一緒にいながらも、

なかなか立ち直れませんでした。聖書や教会のことも忘れていました。

約七年前、韓国語の勉強を始め、私は我を忘れて没頭しました。否な事を全て忘れられるのは、これしか無いと思い、家族の理解もあつてほとんどのエネルギーを勉強に注ぎました。おおよそマスターできた時、私は自分が努力して築きあげた結果だと有頂天になりました。神様が導いてくださっていることがわかりませんでした。

今考えたら不思議です。韓国語の勉強で出会ったクリスチャンの友達を通し、聖書についての様々な本やインターネットの読み物が韓国語で与えられました。聖書に書かれたことは全て真実であり、神様の生きた御言葉ということ、常に祈って神様に近付くことの大切さを知りました。時々友達のアドバイスを受けながら、一人で少しずつ聖書を読み、祈りました。毎日祈るようになってから、神様の存在を少しずつ感じるようになってきました。

教会に行きたくなりましたが、まだ面倒だという気持ちがありました。勉強に関すること以外は、人との交流が嫌でした。どこの教会に行けば良いのかも分かりませんでした。その問題について、毎日祈りました。ある日、ふと、教会学校の時の悠子先生を思い出しました。そして、クリスチャンの友達が悠子

先生に会いに行くことを勧められました。私は大濠公園教会の近くに住んでいるのに、十二、三年もの間、そのことが全然頭に思い浮かばなかったのです。

教会に通い始めて私は、神様が導いてくださるのをもっと強く感じるようになりました。祈って待ったら、必ず神様は聖書の御言葉や榎本先生、また様々な出来事を通して応えてくださることを知りました。

私は前田教会を去って、長い間さまよいましたが、結局大濠公園教会に戻って来ました。想像もできなかったことでした。

この世における問題や悩みが全て解決したわけではありません。これから先の神様の御計画を計り知ることはできません。もし許されるのならば、聖書の一つ一つの御言葉に込められている神様の深い御心を私はこの肉体の最後まで求め続けたいです。弱く小さな私ですが、いつも神様と共にある者となれるよう、祈り続けて生きていきます。



2012年11月25日 洗礼式にて救いの証し

夏の終わりに —— 神様への手紙 ——

井田れい子（大濠）

オリンピックに湧いた八月も終わりに近づき、立秋はとつくに過ぎたというのに、この暑さはいつまで続くのだろうか……。それにしても、あの九州北部豪雨の後の暑さはすごいものだった。

体がまだ暑さにうまく順応しない内に、豪雨による多量の湿気と一気に上がった気温によって、九州北部は蒸し風呂のようになり本当にこたえた。

六十歳代の私がこうなのだから、高齢者や病気の方々にはさぞかし辛い夏だったろう。

小学生の頃、日本には四季があつて、その時々々の風景が美しく、ある政治家のキャッチフレーズではないが「美しい日本」だと教わった。しかし、今やその日本の気候は大きく変わり、エアコンなしでは過ごせないようになった。

お盆が過ぎると飛び始めた「蜻蛉たち」、朝夕、涼しくなると見あげた「行き合いの空」、そんな季節感が薄れていくのは淋しい。

“地球温暖化”が叫ばれて久しいが、地球の大気を安定させるには気温の上昇を2度以内に抑える必要があるとされる。国際エネルギー機関(IEA)の今年の発表によれば、そうするためには二〇二〇年までに再生可能エネルギーや省エネ技術への投資を世界規模で現在の二倍にする必要がある、二〇五〇年までには約二八八〇兆円以上もの投資をしなければならぬそうだ。風力、水力、地熱などの自然エネルギーを利用した発電が益々不可欠なものとなり、再生可能エネルギーの利用・開発に向けての技術革新がこれから本格化するだろう。

使用済み核燃料の始末もできないような原子力発電はこの狭い日本の国土ではもう終わりにしてほしいと私は思っている。子や孫の世代にまで負の遺産を残してはならないからだ。

私たち団塊の世代は戦後の日本の時流をつくってきた。ただ単に人数が多いというだけでなく、経済、生活、文化などあらゆる方面においてその原動力を担ってきた。

しかし、今や少子高齢化の波は先進各国に押し寄せている。日本では、もうすぐ、四人に一人が六五歳以上になり、五十年後は二・五人に一人となる。政府は高齢者を「支えが必要な側」ではなく「支える側」にする意識改革が必要だと訴えはじめた。

二〇一二年度の日本の一般会計予算は九十兆円。この予算を

賄う歳入の主なものは税収の四二兆円と国債(国の借金の四四兆円)である。一方、歳出の最たるものは社会保障費が二六・四兆円で全体の三割を占めており、これは今後も毎年一兆円ずつ増え続ける予想されている。日本は今でも借金が一〇〇〇兆円もあるというのに、この先も更に新たな借金を積み増やしていかなければならない。こんな現状を生きる子供や孫たちの世代は、これから一体どんな暮らしを強いられていくのだろうか。ロンドン・オリンピックはライブではなく昼のダイジェスト版を見た。

とても真夜中に起きて見る元気はない。家事をしながら、ついでに見る“ながら族”ではあったが、録画とわかっていても日の丸をつけた選手を見つけると、やはり手をとめて応援してしまう。

英国に出發する時の選手達のインタビューを聞くと、昔のように「日の丸を背負って」という印象ではなく、「楽しみたい」という言葉が多く聞かれた。若い人達の母国への思いが変わってきているのかもしれないし、「スポーツ」という言葉を持つ元来の「楽しみ」「気晴らし」という意味に近づいてきているのかも知れない。

しかし一歩、母国を離れて海外で暮らしてみると、いやおうでも日本人であることを意識させられる。選手達の気持ちの中

にも、行きと帰りとは多少なりとも変化があつたのではないだろうか。

二十年ぐらい前になるが、英国に住んでいた時、取っていた新聞「ザ・タイムズ」に一流百貨店ハロッズのクリスマスセールの様子が写真入りで載つたことがある。そこにはシヨーケースの前に陣取つてブランド商品をしつかり握つている日本人女性が数人写つていた（当時ヨーロッパでブランド商品を買集めるのは日本人と相場は決まっていたし、その中に知人がいたので日本人とわかつた）。英国の新聞にそれを見つけた時、私は日本人として非常に恥ずかしかつたことを覚えてゐる。

英国人はブランド商品には何の価値も見出さず、いつまでも古い物を大事に使つている。国民性の違いと言えばそれまでだが、逆に、そのような氣質に英国の「豊かさ」を感じる。

先日新聞に出ていた記事であるが、エリザベス女王の公用車は「ベントレー」だそう。ベントレーは一九九八年にドイツのフォルクスワーゲンに買収されたが、そのようなことには何のこだわりも持たず、女王は今も平然とそれに乗つてゐるという。そこに、英国人の「おおらかさ」を見る思いがする。

母が五ヶ月間の入院を終え、今年の三月に退院した。

どういふわけが、その頃から私は教会に向かう足が重くなつ

た。礼拝に出ても、ただ椅子に座つてゐるだけという状態が続いてゐた。説教は心に響かず、その内容もいつも同じものに聞こえた。

そんな折、地下鉄の駅の階段を頭から落ちるといふハプニングに見舞われた。六月三日のことである。幸い頭は打たなかつたが、右肩と腰を打ち、肋骨が折れてゐた。通院するはめになつたが、なぜこのような思いがけないことが自分に起こつたのかわからない。

起き上がりながら、直感的に、何か目に見えないものが自分に働いてゐるようにも感じた。

私が足を踏み外した訳でもなく、誰かにぶつかつた訳でもない。

何が原因でどういう風に階段を落ちたのか、今もつて全くわからない。

お盆に東京の次男夫婦が帰省した。それに合わせ、長男家族も犬を連れてやつて来た。いつもは主人と二人だけの我が家が九人と犬二匹になつた。

ともかく、全員が寝ることができるように、主人と二人で家の中を片付け、スペースを作つた。打撲と骨折の後遺症が残る体で少々不安のあつた私だったが、無事に終わることができ、皆でよい時間をもつことができた。

母の入院から此の方、一連のできごとの中で、私は自分の力だけではない、別の大きな力を感じている。

もう書くことはないだろうと思っていた「ぶどうの木」の原稿もまた書いている。

慌しかった私の夏は今こうして終わろうとしている。

「神様、いつも見守り導いて下さり有難うございます。

母も大腸がん、脳梗塞、脳出血と病気が続きましたが、

その都度、助けていただきました。

きっと私が一人っ子なので、淋しがらないように

長生きさせてくださったのですね。

その母の命の火も次第に小さくなり、今にも消えそうです。

その日は、いつ、どんなふうになってくるのでしょうか。

でも私の心は、感謝の気持ちであふれています。

神様のお創りになったこの地球は、日本は、これからどうなっていくのでしょうか。

私たち人間は、知恵を絞って、いつも何かを追い求めています。

しかし、それには限界があり、決して完全に望みを叶えることなどできません。

それどころか、神様から賜っていた沢山の恵みを壊していつてさえます。

自分勝手に高慢な私たちですが、どうか見捨てずにいてください。

私たちは神様のおつくりになった子供なのですから」

二〇二二年八月二七日 井田れい子

## 主は癒し主

長 田 正 幸 (前田)

### 一 腰痛治る

昨年(二〇二一年)の夏ごろからだだったか、腰が痛くなった。

歩く分にはひどく支障はないが、憂鬱な気分になる。

最初の頃から整骨院に通い、機械による圧力治療やマッサージ



ジを施してもらったが、はかばかしくない。マッサージ師によると、「坐骨神経痛」ではないかという。

年が明けても、鈍痛と時々刺すような痛みは変わらない。整骨院には週二〜三回通ったが、あいかわらずであった。一月が終わった折、整骨院から廃業の通知が来た。

他に行く気もなく、そのままにしていた。二月一〇日ごろから、毎日主に祈った。

「私を守ってください。私を憐れんでください。腰痛を取り去ってください」。

乳がんの時もそうであったが、厚かましくても何でもお願いしてよろしい、主は聞いてくださる、と榎本牧師が言われたはずだ、あるいは日々の聖言にあったはずだ、と自分勝手に言い聞かせて祈った。

二月十九日であった。約一時間の予定でウォーキングに出かけた。折り返して帰る途中、大きな交叉点で信号待ちの間前後屈・腰をまわす・指で腰の下部を押すなどしたが、かえって痛みは増したようであった。

帰って部屋に閉じこもり、「私を憐れんでください。どうぞ腰痛を取り去ってください」。

そこで恰好つけて、「でも、御心ならば、そのままにしていただいても結構です」と祈った。

ところが！・・・翌二〇日、朝起きると嘘のように痛みが消えているではないか。

これは早速お礼を申し上げなくてはと、「天の愛するお父さま。み名をあがめて、感謝してお礼申し上げます。私の祈りをお聞きくださりありがとうございます。今朝、腰痛は治っておりました。ありがとうございます。主・イエス・キリストの御名をあがめて、感謝してお祈りいたします」。

もうあれから五ヶ月余を経過したけれど、全く痛みはない。

主イエス様を、私は信じます。

「あなたは自分の身に起こったことで信じたのか。

目に見えないものを信ずる者は幸いである」。・・・と言われてはないだろうか。 (一二年七月三〇日、記)

## 二 前立腺がん

二〇一〇年に乳がん、そして手術。十一年から十二年にかけて腰痛と、主は私に病を与えてくださいました。そしてその都度、お恵みをいただきました。

「主よ、あなたは、あなたのなさったことで、私を喜ばせてくださいました」(詩篇九二・四《新改訳》)

またまた引き続いて、主は私に病を与えてくださいました。

今年、腰痛と並行して十一年夏ごろ、かかりつけの医師が慌てたように、「前立腺がんのPSAの数字が急激に上昇している」というのである。

「早速、紹介状を書くから」と大病院を紹介された。

（榎本牧師が言われた。「あなたは女性がんと、男性がんとを持ちましたねエ」。まことに主は私に特別に病を与えてくださいました。ありがたいことだと言わなければなるまい。）

大病院は、血液と患部の精密検査を行い、腹部にブスツと数万円の薬を注射した。これは一ヶ月に一回、数か月行うという。

その副作用が半端でない。冬場でも急に汗が出てきたり、ウォーキング教室の実技の時、めまい(眩暈)がして倒れそうになったり、便秘になったり、夜中トイレに行くのが七、八回起きたり、さんざんであった。

それを主治医に申し出ると、睡眠薬や下剤、尿の促進剤などを処方する。乳がんの薬も服用するので、飲み忘れしないようにするのが大変。それでいてウォーキングや腹筋運動など補強運動は大いにやりなさいという。

「めまい(眩暈)がして倒れそうになった」と言ったら、それは薬の副作用と疲れがかさなったものだろう、疲労を重ねないようにということであった。眩暈は一回だけであった。食欲は

旺盛である。

腰痛が癒えたあと、三月中旬、前立腺がんについて大病院は、「これまでの経過から手術の必要はないと思う。放射線治療を三〇回行えばよいと思う」という。休日を除き毎日、放射線治療を受けた。

ここでも乳がん(それに腰痛)と同じように主に祈った。「私を憐れんでください。私のがんを治してください」。

三月下旬、主治医が言った。「がんは高熱に弱い。別の病院に電磁波温熱治療の設備がある。それを受けたらどうか。放射線治療との相乗効果で悪性腫瘍細胞が死滅する。一回一時間、週一回、五回で終了する」。「お願いします」と言った。

その医師はその応援診療に行っていることが判明した。よかったと思った。

ところがまた非常な苦痛が与えられた。患部周辺にグリースを塗り、体内部に電磁波を当てて患部に加温する。体が動くと困るといふ。六〇分間、不動のうつ伏せの姿勢が要求される。

加温血流によって全身に熱がまわりどっと汗がふきだす。看護師は「気持ちを落ち着けるため、CDの音楽など持参し

たらどうですか。かけてあげますよ。」という。当初、バツハを持参、二回目からモーツアルトのピアノ曲に変えた。

治療に耐えられず、断念するケースもあるらしい。

治療は前評判以上に大変であった。毎回、熱い、熱い。毛髪も汗でグショグショになった。看護師二人が氷に浸したタオルを背中や頭の分を取り替えてくれる。「あと二〇分です」と言われ、その長く感じられること。もう音楽どころでない。「いつくしみ深き、友なるイエスは……」と繰り返し頭で歌った。

同時に、おれはあのアジア大会で猛暑に耐えて走ったではないか。そのようなことまで憶い出して歯を喰いしばった。

そして主に祈った。「この苦痛は主が与えられたものですか。私をお守りください。」

四回目だったか終わったとき、看護師が「長田さんが一番ですよ。」と言った。「こちらは意識朦朧(もうろう)、何が一番かと問い返す気力もない。

主治医が温度のグラフをみて「よいデータが記録されています。立派な結果です」と言った。これが一番だったのか。

五月初旬、やっと放射線治療も電磁波温熱治療も終わり、解放された。

「治療終了後二〜三カ月は抵抗力が低下しています、種々副作用も続きます。」と主治医は言った。その通りであった。

八月になって、主治医の診察を受けた。「PSAの数値は、〇、〇七九です。精密検査の結果です。これ以上の計測は不可能です。」明確に言われたわけではないが、まず再発の恐れはないであろうという感触を得た。

これも、主が医師を用いて図られたことである。

「天の愛するお父さま。み名をあげて、感謝してお礼申し上げます。今回も私をあわれみ、慈しみ、お守りくださいました。私の祈りをお聞きくださいました。ありがとうございます。主イエス・キリストの御名を崇め、感謝してお祈りいたします。」

(十二年八月十五日、記)

## 八幡前田教会に導かれて（後編）

松原 宏 篤

（北広島チャペルキリスト教会）

### 一 三十五時間の船旅

埼玉入曾キリスト教会にて、主が全ての被造物を用いて示された御心は、この者を再び八幡前田教会へ導いてくださる為の、主ならではの大胆なお取り計らいでした。このような者にでも、一方的に与えてくださる恵みのご配慮に、圧倒されながら、私はその日の夕方に、新門司港行きフェリーに乗り、東京有明港を出港しました。

船内客室ベッドに、大量の荷物を下ろしながら、与えられた真実を、少し飲み込みきれしていない自分を認めつつも……しかし、このような者にでも、ここまで壮大に御心を成してくださる主に、嬉しさ、喜び、感謝……前向きな感情が引き出されていくのと同時に、キャリーバッグからも船内を快適に過ごしていくための道具が一つずつ引き出されていきます。一通りの宿泊道具の準備をしている最中に船内放送にて、「新門司港到着

は、翌々日の朝五時を予定しております。」というアナウンスが流れました。準備の手を止めて、少し立ち止まって考えないと、把握できないような船旅に、否応なしに気分が少し遠くなってしまう。しかし、時をも超える主は、狭く無骨な船内で過ごす三十五時間を御恵みの中で過ごすようにと、既に御心を成させ、示してくださっていました。

岸を離れて僅かに揺れ始めてきた船内で、私が手にしていたのは、先週日曜日に私の隣に座って礼拝を捧げていた正野兄から戴いた、初穂になられたお母様の信仰の生涯を綴った本でした。非常に情けない話ですが、日曜礼拝後にこの本を頂いた時は、私自身の至らなさにより、かなりの混乱を覚えていた最中で、次週の礼拝を、他の教会にしようかとも考えていたくらいでした。そのような私に対して主は、計測車を完全に故障させ、私を東京に戻して、小島清志先生を与え、八幡前田教会の賜物を示し、さらにその恵みをより味わえるようにと、この狭いフェリーの中で、読書に専念できる、環境と時間を用意くださったのだと思います。

結果的に、翌々日の朝五時到着という、三十五時間の船旅は、読書↓船酔い↓睡眠↓読書↓船酔い↓睡眠↓読書↓船酔い……という無限ループを繰り返すことにより、時間の経過に飽きることもなく、本を読み終える頃には、もうすぐ新門司港到着

という、絶妙なタイミングの中を過ごしていました。

そして何より、初穂として信仰を与えられ、戦前戦後の混乱の時代を、忠実な主のしもべとして祈り歩んだ、正野サカエ姉の信仰の生涯は、奇しくも同じく初穂として、この地上に生かされている私にとって、多大な衝撃を受けることとなりました。九州で記された沢山のお証しは、時代も場所も越えて、遠く北海道で生かされているこの者に及び、その大いなる恵みを分け与えてくださいました。そのようにして、誰にも予想できない、主のご計画が進められている中、「これ以上、絶対に壊れないで欲しい」という、部長の切なる願いが籠った計測車とともに、私は再び九州の地に入ることができたのでした。

## 二 完全に直らなくても

再び、八幡東区亀の井ホテルを拠点として、まだ五百箇所以上も残っている北九州市の市道を一本ずつ計測車を走らせて、調査する日々となりました。この路面性状調査において、絶対的な商売道具であるこの計測車は、日産のマイクロバスを改造して造り上げた車両であります。本来、バスという目的で造られた車両が、最先端の技術が介入することによって、路面の傷みや、磨耗を調べる特殊車両へ大変身するのです。しかし、純正製品を無理やり改造してしまうせいなのか、はたまた、人間

の知識・技術は、主の前に無知・無力で不完全であることを知らしめるためなのか、本当によく壊れてしまっています。

計測車は、『働く自動車』と言えば連想できる、小さな子供たちが喜びそうなデザインと大きさで、見た目はとても頑丈そうなのに、一方の自身は精密機械を沢山積んでいるので、実はとてもナイーブで、酷い時はマンホールの溝の段差を踏んだ衝撃でレーザーが壊れ、神奈川にある修理工場まで戻ることもあるくらいです。

その計測車が調査する、道路状態の重要なデータは、

- ① 路面のひび割れ（カメラ故障により×）
  - ② わだち掘れ（レーザー出力低下、照射ズレにより×）
  - ③ 平坦性（進行方向の凹凸。センサー故障せず○）
- の三つのデータです。『三方向調査』と呼ばれており、現場

調査後に専門の解析班がこれらのデータを引き継ぎ、纏め上げて評価し、国や県庁、各自治体に提出するのです。今回の修理では、レーザー出力低下を完全には直すことができず、よって、

「② わだち掘れ」のデータを取ることが不可能な状態のまま、修理工場から戻ってきました。本来であればデータが揃わず、もうお手上げ！となるのですが、実は、この業務を委託した市の担当者との事前打ち合わせで、

「今回の調査では、わだちのデータは要らない」

ということが、決定していました。私はもちろん、長年のキャリアを持つ部長にとつても、わだちのデータが要らない、と言ってきた自治体は、過去に一度もありません（ひび割れのデータが要らないことは稀にあります）。私たちも、北九州市調査を始めた頃は、「わだち（のデータ）が要らないって、どうしてだろうね？」と、疑問に思っていました。この出来事に導かれてから、一人で、なるほど…と、ニヤリとしてしまうのでした。

「人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。」（箴言十九章二一節《新改訳》）

### 三 カムバック

こうして、全く予想もつかなかった導きにより、二週間ぶりに再び八幡前田教会へ、行くことができました。改めて二週間前のことを思うと、一人で勝手に思い煩っていたのが、本当に恥ずかしくなりますが、逆にこのような弱い自分であることに気づき示され、謙る機会が与えられ、感謝にも思います。

礼拝堂に入り、椅子に座り、過ぎ去った一週間を振り返ると、「奇跡的に戻って来られた……。」という思いが込み上げてきて、ホッとしました。いつのまにか、礼拝生活が当たり前となっていたのでしょうか。毎週日曜日に、自分で教会に向かつてい

るつもりでも、主のお許しがなければ、御前に集うことも叶わないことを学び、今までの態度を省みることができ、とても良い機会となりました。当たり前だと思っていることが、実は当たり前ではないことを、身に染みて学習すると、普段、何気なく接しているあらゆる事が、とてもありがたく感じてきます。

普段、いかに感謝が足りない者であると、教えられました。この北九州調査の期間は、再びフェリーで戻って来た時を境に、礼拝も集会も交わりも、そして何故だか、辛いハズの仕事までもが、大変貴重に、ありがたく、楽しく感じるようになっていました。この時、暦は十月末。部長と二人きりの深夜作業は、もはや三ヶ月目に突入していました。体力も精神力も大分消耗してくる頃になると、些細なことで口論になるような、人間の醜い部分が露出する危険な時期なのですが、主の多大なる恵みにより、部長もこの北九州市という街が大好きになり、夜な夜な大きな計測車を走らせては、

部長「まっちゃん！今日は門司へ行ってきたぞ。レンガ調の倉庫って趣があるね。いつ建てられたのだろう？」

別の日では、

部長「まっちゃん！ホテルのすぐ傍の空き地でお祭りやるみたいだな。あれ、なんだろう？」

さらに別の日では、

部長「まっちゃん！今日、黒崎のデパートに行ってきたら、お相撲さんが歩いてたぞ。そういや、スペースワールド近辺に、どこかの部屋の幟が沢山あったけれど、何部屋って書いてたっけ？」

日中、ホテルの客室清掃の時間に外出して訪れた場所や、気になった町並みについての話題で、車内は賑わうこととなり、肉体的な疲労は否めないものの、主がこの街に与えられた沢山の恵みの数々を、部長も私も、楽しく数えさせていただくこととなりました。

このような現地出張作業は、休日は雨天のみとなるのですが、そのような不定休の世界においても、主は哀れみ深くお取り計らいくださり、名古屋に続き、礼拝出席を欠かすことなく、主の御前に集うことを許してくださいました。毎週日曜日の礼拝を楽しみにし、部長もその日に訪れる場を楽しみにする毎日によって、溜まった疲労を感じさせないようなスピードで、路面調査は護られて、作業は加速度的に進んでいきました。

しかし、私たちにこの地上で与えられたこの肉体は、当然、限界があるものです。作業もようやく中間地点に差し掛かった十一月初旬、私も部長も、突然、体調を崩す日がやってきました。

#### 四 神癒に触れて

ある日の深夜作業中、突然、私の鳩尾あたりが、強く締め付けられる痛みが走りました。何の前触れもなくやって来た痛みは、この身に何が起きたのか、ビククリして冷や汗が出るほどの、経験したことのない痛みでした。その日は、強引に予定の調査を終わらせて、翌日にすぐさま戸畑区にある消化器科へ駆け込み、医師に症状を伝え、お腹を触ってもらうと、ほぼ間違いなく胃潰瘍か十二指腸潰瘍と言われ、夜から絶食して、翌日は胃カメラを飲むことになりました。主の憐みにより、その日の作業は雨天中止となりましたが、独りホテルで忍ばなければならぬ、心細さと、絶食で空腹になると増してくる胃の痛みは、とても耐え難いものがありました。祈ることでは、平安と解決を得られる方法はありません。その時は、ただただ、癒しを求めて祈るしかなかったのですが、あまり体力に自信のない私に、このような形を用いて、主をさらに覚えて、喜んで求める者になるようにと、肉体的な疲労を覚えさせて、求めさせます。そして、毎回奇跡的にしばしの休養の時も備えてくださるのです。ちなみに、この北九州市調査のおよそ一年後の、秋田県計測においても、突然嘔吐が止まらなくなり、脱水症状を起こして、一週間ホテルに籠っていた時も、同じように、ホテルという孤独な場を用いられて、主と長く深い交わりの時を与

えられていました。(このときの秋田県での、ホテルで静養中の一週間は、全て雨天で夜間作業中止に!)

正直に、できればそのような事態には遭いたくないのですが、よく起きてしまう。体調不良を通して、独り鎮まり主をより求めていくとき、主の恵みと哀れみが、後にさらに深いものとなっていくのも、事実であります。

胃痛に苦しむ孤独な一夜を、なんとか祈り過ごして、朝一番で病院へ行きました。

「胃カメラ飲んだことある?あまり旨いモンやないね。」変なことを言うお医者さんは手馴れた手つきで、鼻から胃カメラを挿入してきます。こちらは緊張して体が硬直するばかりで、カメラを味わう余裕などありません。鼻だし。しかし、胃カメラによる苦痛は驚くほど感じないまま、胃カメラはどんどん体内に進入し、結局、胃に潰瘍が二箇所見つかりました。生活リズムの乱れ、ストレス、食べすぎ、睡眠不足……沢山の原因はあるものの、一括りにすると、『体調管理も仕事のウチ』ということです。当然であります。人にそう言われると、気分を害してしまうこの言葉も、主の御言となれば、

「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価

を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」

(第一コリント六・十九〜二十《新改訳》)

そう戒められると、胃潰瘍の原因となるような、仕事後、いくら夜中であろうが、空腹に負けて食ってしまう、大盛りのちやんぽん等を思い出し、度を越えた食欲を反省せざるを得ないのであります。

待合室においても、検査室においても、「北海道に北広島つてあるの?」と、もはや出張時には当たり前となっているヒソヒソ話を耳にして、ひと先ず病院から解放となりました。麻酔が抜ける一日か二日は、安静が必要でしたが、このとき、部長も珍しく風邪をひいたようで、体の節々が痛い、とのこと。ドライバーもオペレーターも二人揃って仲良くダウンし、親会社も、これでは仕方なしと、客先(市役所)に掛け合って頂き、今度は計測車ではなく、人間にしばしの休息が与えられることとなりました。そして迎えた日曜日、礼拝後に行われる神癒会の時、神癒の恵みに与ることとなりました。数日前に電話で事情を話した際、是非、神癒に与ってください!と快諾していただきました。しかしいざ、立ち上がって前に進み出ると、第一回目の礼拝の混乱を思い出して、少し赤面してしまいます。しかし同時に、「えっ?神癒って何なの?」と不信感を抱いた者



を、その約一ヶ月後には、その場に集めて、直接神癒に触れさせるという、主は不信仰を咎めることもなく、むしろ恵みを与えてくださいました。

頭に手を充てていただいて、「わたしは主であつて、あなたをいやすものである」との御言を頂きました。この時、二つあつた胃潰瘍は、どのように取り扱われ、癒されていったのでしょうか。感覚には覚えるところはなくても、主が御手を伸ばすことによつて、それから一年以上経つた今、九州で触れた神癒の恵みは、突然、私の救いのきつかけとなつた病氣と癒しを明確に思い起こさせるのであります。

## 五 マツがうつになりまして

今から九年前の二六歳の郵便局員時代、不本意な転勤を契機に、動悸や不眠症をはじめ、様々な心身症に悩まされ、時間を経て、大変重いつ病を患つてしまいました。それまでは、就職して一人遠方に出て、衣食住全てを自分でやつていくことが、こんなにも楽しいことだったのかと、本気で思つていたくらい、公私ともに、非常に順調な社会人生活を送つておりました。当分は、職務の中で蹟く要因もほとんど見当たらなく、当面、ほぼ約束されている生活に、まさに心情は「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べ

て、飲んで、楽しめ」(ルカ十二・十九《新改訳》)と、心は完全に安心しきつていた状態でした。

しかし、主は人が最も高ぶる瞬間を待つておられたのか、「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いっただれのものになるのか」(ルカ十二・二十《新改訳》)

青天の霹靂の如く、これが幸せと思う程、順調で平易な生活は、不可解な転勤によつて、これが不幸と思う程、不順で困難な生活へと急転してしまいます。

ついこの前まで、何も考えずに出来ていたことが、突然出来なくなる。思い出そうとしても何も思い出せない。そして、体もまるで重力が数倍増したように、全く自由に動かない。かつて七十五万部も出版されたエッセイ漫画、『ツレがうつになりまして』というお話のように、順調な生活が、何らかの要因で一変して泥沼の生活に突入していくような展開は、読者は固唾を飲むようなことはあつても、実際に体験する者にとつては堪つたものではありません。一瞬にして、全ての能力と仕事、何の不自由もなかつた生活を奪われた感覚は、まさに生き地獄そのものでした。地元に戻つても、もはや生きることに何の価値も見出せず、隙あらば死へと簡単に向かつていくような状態でした。しかし一方で、こんな不条理な人生で終わりたくない、

という生への望みが入り混じる葛藤生活を続ける間に、現在の母教会、北広島チャペルキリスト教会へ辿り着いたのであります。

「私たちが滅びうせなかつたのは、主の恵みによる。

主のあわれみは尽きないからだ」(哀歌三・二二)《新改訳》

死を望むあまりに、実際に二度も重傷を負った者が、今こうして生かされて、皆様にこのお証しを読んでいたいただいていると思うと、改めて不思議な気持ちになります。しかも、教会を訪れた最初の目的は、当然ながら病からの脱却と、社会復帰を願っていただけでありましたので、魂の救いを求めること、まして私が罪人で、主イエス・キリストを十字架に架けた張本人であることは、当時、全く考えてもいませんでした。寧ろ、不利益を被った被害者なのだから、悪いのはあちらのお偉い方が：…と言いつ張りくらいでした。当時は精神不安定で、気性も大荒れでしたので、牧師をはじめ、教会の皆様には、多大な忍耐を要させてしまったと思います。

「銀を受けるよりも、わたしの懲らしめを受けよ。

えり抜き黄金よりも知識を」(箴言八・十)《新改訳》

そこで主はそのような者に躰をするかのように、あらゆる導きの中で、さらに健康と財を失わせます。ついに病院へも通えなくし、記録的な猛暑によって、異常なほど蒸し暑くなった部

屋の中で、急激な断薬による精神衰弱で動けなくなった身に、主はこれからどうするのかと、決断を迫るようになりました。

衰弱しきる中で、ようやく私は初めて、自分では何事も成すことは出来ない、罪深く惨めな者であると痛感させられ、長年積もっていた被害者意識を改めさせられ、赦しを乞うこととなりました。

過激なやり方にも思えますが、私の場合はここまでされないと言ふことを聞かなかつたのでしよう。しかしながら、最初に教会に導かれた時、魂の救いを求めてきた訳ではない者を、どうしてここまでして、従わせようとしたのでしょうか。イエス様が罪人である私の赦しの為に、十字架で命を架けてくださったという、良い知らせ、福音の真実を信じさせるためであることに間違いありません。

『可愛い子には、旅をさせよ』と、早期の出世を願う局長が、早期の出世を嫌がる部下に、無理やり旅をさせたら、部下が旅先で死んでしまったお話は、局長が願う地位や名誉を受け取る代わりに、死んだ旅先で、主が願う魂の救いを受け取る結果となり、めでたし、めでたし、となるのでした。

ちなみに、八幡前田教会に初めて導かれたのは(平成二十三年十月)、この断薬出来事の一年半後で、ピーク時、一日で三十錠も処方されていた投薬生活を八年かけて終えてから、まだ

半年経過したばかりだったのです。

「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」(詩篇一一九・七一《新改訳》)

## 六 全国の神の家族と出会って

初めてのことづくしであった北九州市滞在は、私にとって、どれだけ主に護られ、恵まれて導かれた歩みだったのか。当時を振り返ると、昨日のことのように沢山のことを思い出し、ふと、「また、行きたいなあ……。」とポロツと周囲に度々に漏らしてしまいます。もう何度も聞かされている友人、知人にとつては、「またか。」という反応でしかないのですが、こちらも素直に「まただよ。」としか言えないのです。この仕事を続けていく間は、待つていればいつか必ず同じ物件を落札して、同じ土地へ調査に行くことになるのですが、それは少なく見積もっても、数年後のこと。次の北九州市への出張は、一体何年先になるのか。もしその時に会社が落札できなければ、さらにその先になります。

「それは人にはできないことですが、神は、そうではありません。どんなことでも、神にはできるのです」

(マルコ十二七《新改訳》)

果たしてどうなるのかなと、必要のない思い煩いを続けること僅か三ヶ月後、今度は『福岡県計測』として、年明け二月には、早くも再び八幡前田教会の礼拝堂に座っていたのであります。さらにそのおよそ半年後の去年十月には、またもや『福岡県計測』として、滞在ホテルは篠栗ではありましたが、今度は福岡大濠公園教会へ導かれることになったのです。

いざ蓋を明けてみると、結果は一年の間で福岡県へ計三回。少しも待つ暇が与えられなかった程、主の御力をこれでもかと、見せつけられたのです。そして時に適って出会ったお一人お一人の主に従う姿勢は、まだクリスチャンホヤホヤの私に、神の家族とされている恵みの素晴らしさを沢山教えてくださったのです。本当にありがとうございます！

去年一年間では、三重県、東京都、福岡県、新潟県、奈良県、秋田県、青森県と導かれて、その地域で日曜日ごとに、礼拝を捧げることが許されました。その先々でも、沢山の人の出合いが与えられ、また、沢山の恵みをいただく幸いな時となりました。全国のどこへ行こうと、神の家族はいつまでも変わらずに、ある日突然、何の前触れも無く教会に現れる得体の知れない私を、どこへ行っても、皆様は笑顔で暖かく迎えてくださいました。

「こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」

(Ⅰコリント十三・十三《新改訳》)

すべてに勝る、主イエス・キリストという愛の帯を結びに締めた皆様と出会うことができたことは、主から頂いた宝として、これからも感謝して、次へ導かれる旅路への糧となるように願っています。

毎度どこへ行くのか全くわからないこの仕事と信仰生活は、

「主は、昼は、途上の彼らを導くため、雲の柱の中に、夜は、彼らを照らすため、火の柱の中にいて、彼らの前を進まれた。彼らが昼も夜も進んで行くためであった」

(出エジプト記十三・二二)

まさにこの御言に集約されているのであります。

主の御心のままに導かれ、その中で、再び皆様とお会いできる日を、楽しみにしております。

(二〇一三年三月三日)

## 五七五

伊 規 須 太 郎 (戸畑)

◎ 主の一字 初めのはじめ 元の元

◎ 生も死も 使命思えば 身が震う

◎ 明かき扉(と)に 小躍り向かう ついの景



## 落第教師終了の記

正野 眞 宏（前田）

私は平成二四年四月をもって、日曜学校教師を終わらせていただいた。私が日曜学校教師となったのは、昭和三八年四月であるから、二五歳の時である。以来四九年間させていただいたことになる。今振り返って感無量なものがあり、これをさせていただいたがゆえに、今の自分があると思う時、主の導きと恵みに感謝せざるを得ない。退任を機に、これまでの歩みを記録し、主を崇めたいと思う。

私が八幡前田教会へ行くようになったのは、両親が食堂を開くために黒崎へ転居し、それまでの宗像市の東郷教会から八幡前田教会へ行くようになったからである。この教会に来るようになって、はじめて信仰の何たるかを知り、真剣に求めるようになり、一年後に罪の悔い改めに導かれ、二年の後昭和三六年四月に受洗の恵みに与った。

その頃は、伝道集会、祈祷会、早天祈祷会、集会という集会にはほとんど出席していた。そういうこともあつてか、榎本利

三郎先生が目をつけてくださったのだろう、ある日、日曜学校の教師をするように言われたのである。

その時のことを、昭和四十年に発行された「ぶどうの木」第一号に、「落第教師」と題して掲載したが、そこには、

『エッ！何ですって、この私が日曜学校の先生に……？ご冗談でしょう。私みたいなものが……』

ある日の礼拝後、帰る時になって、榎本先生から日曜学校三級（男子中学生クラス）を加勢するよう、当分は伊規須先生の話を聞くだけでよいからと言われて、びっくり仰天。『これはえらい事になったぞ』、私は頭を抱え込んで家に帰った。

当分は伊規須先生の補助であつても、いずれは説教しなくてはならなくなるだろう。とても、説教なんかできたものではない。

私は生まれつき、話するのが大の苦手、口を開けば恥をかくので、自然と言わ猿となる。母の胎を出た時も、『オギャー』と言ったかどうか、それも疑わしいと思っているぐらいだ。小さい時の記憶はあまりないが、幼稚園ではよく泣いたそう。私はそんな事はないと頑張るのだけれど、家の者はああいふ事もあつた、こういう事もあつたと例を挙げて来る。そうなる、認めざるを得ないのである。とにかく、無口で小心者であつたことだけは間違いない。（中略）

こんな私だ。とても日曜学校の生徒に話しをする自信がなかった。それに自分は受洗後、日まだ浅く、私の信仰は人様に教えるような代物ではない。しかも、神様に対する愛もなければ、熱心もない。まさに無い無い尽しではないか。無い無い尽しの先生は、生徒に躓きを与えるばかりだ」と記している。

私としては、とてもできませんと断りたかった。でも断るとは神様の手を押しつけるような気がしてそれもできず、迷っている時に、「主の救を静かに待ち望むことは、良いことである。人が若い時にくびきを負うことは、良いことである。主がこれを負わせられる時、ひとりすわって黙しているがよい」(哀歌三・二六〜二八)の御言を読み、教師を負わせられるのは主であつて、私は黙つて従うほかないことを悟つたのである。

私が日曜学校教師とされた恵みの第一は、御言に従うことの訓練を受けたことである。私の信仰は、日曜学校の御用の中で導かれ、実地訓練されたと言つても過言ではない。

初めて生徒の前で説教した時もそうである。伊規須先生が用事で休まれ、私が代つて話をするようになった。十分準備したつもりであつたが、生徒の前に立つと緊張して上がつてしまい、覚えた説教が飛んでしまった。しどろもどろの迷説教となつてしまい、生徒が怪訝な顔をして私を見る。私の失望は大きかつ

た。もうこれ以上できませんと、泣いて祈つた時、「わたしたちは、この宝を土の器の中に持つている」(Ⅱコリント四・七)が与えられた。自分に与えられている信仰がどんなに尊く素晴らしきものであるかを示され、与えられたものを伝えるのが御用であると悟り、もう一度生徒の前に立つことができるようになった。

その後、三級を任せられ、毎週説教をしなければならなくなつた。もちろん、事前に榎本先生が教師会で語るべき御言を備へ、その内容を解き明かしてくださるのだが、私はその受け売りではなく、内容は幼稚でも自分の言葉で語るべきだと思つて、真剣に聖書を読むようになった。ただ読むだけでなく、その中に隠された奥義を知らしめ給えと祈りつつ読むようになった。

私が教師となつて与えられた恵みの第二は、生徒に話さなければならぬ重荷から、聖書をよく読み、御言を味わう訓練を受けたことである。教師を終えた今も、朝の時間にフルートによる賛美と聖書を読む時を持つているが、次々と今まで知らなかつた神の深い御思いを教えられて、胸を熱くすることがしばしばである。

この後、私達家族は仕事(産業医科大学設立準備)の関係で千

葉市に移った。近くに良い教会がなかったので、乗り換え三回で一時間半ほどかかる葛飾区の金町教会へ行くようになった。ところがここでも日曜学校の教師を頼まれ、中学生クラスを受け持つようになった。

ミッシェンスクールの子が五、六人来ていたが、ある時、牧師の子の友人で、ひと目で暴走族と分かるいでたちの男子が入って来た。私は驚いたが、神様が送ってくださった魂と受け止め、祈りつつ、示されるままを語った。それは今までにない体験だった。私が語る言葉が、まるでスースーと彼の心に吸い込まれるのが分かるのである。彼は身じろぎもせず、私をじっと見て聞いている。私は話しながら、これは神が働いておられると感じていた。果たして、彼は次の週も、また次の週も、牧師の子が出席しなくても、欠かさず出席するようになった。

その後まもなくして、私達家族は仕事が終わって北九州へ帰ったため、彼がどうなったか分からなかったが、十年ほどして上京する機会があったので、金町教会へ寄って聞いてみると、その後も続けて礼拝を守るようになり、洗礼も受けて、今では青年会の会長をもらっているとのこと、神を崇めた。私が日曜学校の御用をさせていただいて、唯一の实とも言える貴重な体験であった。

人の救いは、いわゆる名説教ではなく、御霊が語る者と聞く

者に働いて、はじめて成されるものであることを知ったのである。これが第三の恵みである。

私が千葉に行っている約四年の間は、その後変わった西南の中学生クラスを私の母が代ってしていた。

私が帰郷したので、西南の高校生クラス担当で再登板することになった。最初は岩隈姉と一緒にしていたが、途中からクラスの組み替えで林正二郎兄とすることになった。私が出席すると、すでに兄は全ての準備をしてくれて、ひとり祈っておられた。兄の忠実な信仰に触れ、また主にある幸いな交わりの時でもあった。その兄が平成十年十一月三日、天に召されたことは、痛恨の極みであった。

その後は、一人担当が続いたが、いつの頃からか、家内がお手伝いという形で参加するようになった。当時の西南は、礼拝出席が義務とされていたので、十人を超える生徒が出席し、下の集會室が満杯になることもあった。そういう意味では活気があり、クリスマス祝会には歌や「聖書面白ゼミナール」などの出しものに出演していたが、思春期の恥ずかしさもあってか、当日の欠席が多く、やりくりに困ったことを思い出す。

その後、平成二十年より以前だったと思うが、西南の方で礼拝出席義務を変更し、自由出席としたので、途端に生徒の出席

が減少した。それでもしばらくは三〜五人程度の出席があつていたが、熱心な子が卒業すると後が続かないと言つた風で、最後の方は一〜二人、それも来たり来なかつたり、という状態となつた。

誰も生徒が来ない日もあり、その時は園田姉と一緒に車で来ていた関係で、家内と三人で礼拝を守つていた。途中から深町姉も加わり、何だか大人の礼拝のようになることもあつた。話の途中で生徒が遅れて来ることもあり、その時は話を分かりやすくする必要があつた。

その頃の私の説教は、準備を十分にしておそれに沿つて話すという、それまでのやり方ではなく、事前の準備は話のポイントの確認だけで(時間は十五分程度)、後は御霊に導かれるままを話すというように変えられていた。だから、自分でも今日の話がどうなるか、大筋はあつても、その通りになるか、自分でも分らないそういった風で、話しながら「そうなんだ」と自分で教えられながらの御用であつた。次々と御言が備えられ、自由に話しているのが自分でも分かる。はあ、これが牧師先生がさされている御用なんだろうと思つたのである。それゆえ、一番恵まれるのは自分であるわけで、御用をさせていただくのが喜びでもあつた。

このことを体験させていただいたのが、教師となつた第四の

恵みで、最大の恵みだつたと思つている。

そして、平成二四年三月の教師会の時、生徒が来ない日が多くなつた現状を和義先生に報告し、クラスの存続如何を相談したところ、四月をもつて休止、生徒は礼拝に出てもらうということになり、私の四九年に亘る日曜学校の御用に終止符が打たれることになつたのである。

今、教師から離れて見て、改めて「まことにわたしは良い嗣業を得た」(詩篇十六・六)と感謝するほかない。まさに日曜学校教師は恵みの御用である。もちろん、苦勞がないわけではない。しかし、それに倍した恵みを、神は用意してくださつているのである。あの無い無い尽しの落第教師が、ここまで成長させていただいたのだから。

そういう意味で、私はぜひ若い人にこれを担ってもらいたいと願つている。

「無きに等しい者を、あえて選ばれたのである」

(Iコリント一・二八)



## 信仰雜感(六)

首藤 正(前田)

### 一 オプション

いつの頃よりか、祈りの時に「イエス様にとって最も良いように、この事についても計らってください。」という言葉をつけ加えるようになった。自分でも少し変と思うけれど、なぜかそう申し上げずには気が済まないのである。

本来ならば、この件について最善のことは主がご存じですからお委ねしますというのが、謙虚な姿勢なのに、それでは物足りなくなつたというか、自分が無になり切れないものを感じるようになったのである。私なりに「主を主とする」あり方としては、前記のように述べて初めて、成り立つ感じなのである。

そうして初めて、心に委任の姿勢が生まれ、しつくりと来るのである。言葉としては、出しゃばり以外の何ものでもないし、イエス様の「最善なんてお前の知った事か」と言われれば、まことにその通りですと、引き込まざるを得ないと心得ているが……。

### 二 初体験

朝の味噌汁作りは、私の役目である。頼まれたわけではないが、早く目覚めるから買って出ている内に、そうなつてしまつた。

ついでお茶用の湯も沸かし、旧式のポットに入れておく。ある時、淹(い)れて差し出した茶を一口飲んだ家内が、「これ、いりこ出しの味がする」と言つて吐き出した。

私も飲んでみると、なるほど変な味。コーヒーも飲んでみたら、とても飲めたものじゃない。湯がおかしいと言うので、ポットの中味をボウルに空けてみたら、底一面にいりこの粉。わが家ではミキサーで引いたいりこの粉の瓶詰から小出しする方式なのである。

さてはガスレンジ上の左側の鍋に入れるつもりはいりこを、右側のヤカンに入れてしまったのか、となつた。無意識に右と左とを取り間違えていたのである。ショック!大急ぎでヤカンとポットを洗つて、もう一度茶を入れたら、やつぱりいりこ味。訳が分からない。別の小鍋で沸かした湯を使つて、お茶を入れる始末。

明くる日、何気なしにヤカンの蓋を取ったら、裏側にビッシリいりこの粉がへばりついていて、洗い漏らしが原因と判明。一件落着したが、今後が心配。

似たようなミスは避けられないにしても、どうか取り返しのつくものであってほしいと、祈らずにはおれないのである。

### 三 刺

従兄の三回忌出席のため、日曜早朝に家内と車で隣県へ出かけた方がいいが、二分と経たぬうちに、タイヤ異常のサインが警告面に出た。一瞬、「行くな」ということかと思つた。

釘を踏んだに違いない。以前にも同じことがあつた。

早朝のせいで、駆け込むにもガソリンスタンドのシャッターは降りたまま。携帯電話はない。やむなく引き返して、自宅に戻つた。早速、JAFへ電話すると、やがて作業車がやってきて、やはり左後輪に刺さつた釘が見つかり、応急手当を頼んだ。

先方へ事情を電話し、一時間遅れで法事の席へは連なることができた。

亡くなつた従兄には長年、亡父亡母亡兄の眠る墓のことで世話になつてきた。カミさんの招請へ、いちにももなく応諾したのはそのためで、折角ストップがかつたのに強行したのは、世間的の辻褄(つじつま)を合わすためだつた。

「死にし者は、死にし者に葬らしめよ」のお言葉は、いまだに身に付かないでいる。

### 四 目 安

連れ合いの顔をしみじみ見ると、おやこんな造作だったのかと、改めて見直すことがある。事ほどに常日頃は漫然と印象そのもので感じていて、細かな事は見てはいないと分かる。自分自身についても、似たような事はある。日頃は何とはなしに自分についてイメージを持つているが、いざ鏡に映して見ると、意外にイメージとは違う顔つきをしているので、エツと虚を衝かれた感じになる。これは私だけのことかも知れないが、この視覚のずれは聴覚についても起こるから、あながち見当外れではないとも思える。

自分の声を自分が聞くのと、他人が聞くのを音色に差があるということ、つまりそれは前者の場合は、自分の骨を経由してくる音と空気を經由してくる音との複合音であるのに対して、後者の場合は、空気伝播音一種類だけという違いに由来するからである。こうあつてほしい、こうあるはずだとのイメージに合わせる努力が、お化粧とも言えなくもない。

自分が持つていると思つている信仰と実際の信仰(神様が認めておられるそれ)とは、食い違つている場合が少なくなつて、その違いを正すためにいろんな試練を施して引上げてくださるという側面がきつとあるに違いないと思えるのである。

問題という鏡にありのままの自分の顔を見せつけられてシユ

ンとなり、これではならじと気を取り直して、内面の化粧直しから手をつけるといった順序を踏むというパターンの繰り返し、想定できるのである。

まだまだ自分の顔に納得がいかないと思える限り、精進は必須のこと、と言ったら、単なる独りよがりになり類する事となるのであろうか。

## 五 軽ろき老年

老年がこんなに軽やかなものとは、若い時分、想像だにできなかった。何とも浮き浮きしていると言っていていくらいである。もちろん、心のことであつて、体のことではない。体は重い。歯がゆいくらいに鈍く、思い通りに動いてくれない。

だからと言って、心が重く沈むかという点、それがそうではないのである。それが他人事（ひとごと）のように笑える。まるで古くなった衣服のことを長く世話になつたなあと、感慨を催す按配である。俗にいつちようら（唯一枚の暗れ着）というが、取替えの効かない一着みたいなのである。繕い繕いして着ていくという代物。肝心なのは、中身。その中身が思いのほか、軽味を増して行くから、衣服のことがあまり気にならないというか、比重が軽くなる。

お恵みで、持って行き所を間違わなかつたせいで、重荷を取

つていただいて、と言うより持っていたいて、かえすがえすも、何とお礼を申し上げてよいやら。

## 六 偶 感

時々、創世記のはじめの所を読んで思うのだが、もしアダム夫婦が、蛇に化けたサタンの巧妙な罠にも引掛からずに撃退していたとしたら、この夫婦にはカインもアベルも生まれることもなく、いつまでも夫婦二人きりの暮らしが続いていたのかもしれない。

そうなると、早い話、カインの末裔の一人でもある私も、この世に生まれることはなかつたということになる。私が生を受けた裏には、エバさんの軽はずみなよるめきがあつたからこそとなるのかと考えると、瓢箪から駒が出たような思考停止状態に持つて行かれそうになる。

この夫婦がトコトン自由意思の善用を貫いていたら、サタンは出番を奪われて、失業状態に追い込まれていたはず。そして聖書そのものも、二章で中断。後は書かれず、仕舞になつていった可能性がある。

ところが実際に起こつたことは、自由の誤用だつた。人による自由意思の自己本位の行使によつて、世界の様相が一変したのであつた。エデンの樂しがるべき人生も、人を取り巻く世界

も平和を失い、相互に相食む無秩序へと変わってしまったのである。

この点、人祖の人生だけに起ったことではなくて、人一人ひとりの上にも、まるで金太郎飴のように同じ図柄で起ることを、創世記第三章は指摘しているであろう。この章を読む時、自分の事として、自分に当てはめて見るように促されているのではあるまいか。

もし人に、自身神の如く思いのままに振舞いたいという要素がなかったら、いかにサタンと言えども、ないものを人間から引き出すことはできなかったはず。神に似せて造られた功罪の見事に裏目に出た憾(うら)むべき自由のマイナス行使。自由の誤用は、死を招くのだった。

自由の最高の善用者だったにもかかわらず、誤用者が受けるべき死を自ら蒙った方こそ、我らの主イエス、救い主となられた贖罪の君なのだ。

## 七 前後

年末礼拝のメッセージは、「主を知ろう。切に主を知ること seeker 求めよう」だった。

その主を知るためには、まず主を信じなければならぬ。また主を信じるためには、主という御方を知らなければ始まらな

い、と言われた。信じるものが薄ければ知ることも薄いし、知ることが薄ければ信じることも薄いとも言われた。

知ると信じると、どっちが先なのか。卵が先か、鶏が先か、という難問が胸に浮かんだ。知行合一という言葉もあるし、同じ事の両面かとも取れた。

今以って、私は自分が歩きだす時、左足が先か、右足が先か知らない。気がつかない内に歩き出している。右の知と左の信とどちらを先に前に出さななど考えてたら、動きが取れなくなりそうである。幸い「信仰は聞くことから生まれ、聞くことはキリストの言葉から」というキーワードがあった。

知が先か、信が先か、迷う暇があったら、いや神様が先だと思ふことにして、この際、けりをつけたのだが……。

## 八 来し方行く末

顧みて、世の中には何の役にも立てなかった自分の人生のことを、借りの多い赤字だらけの歩みだと、ずっと肩身の狭い思いを抱いていた。しかし、それもこれも創造者であられる神様の手作りの器の帰結であったのかと、今頃になってやっと容認できるところまで来た。

結局は、私は私、人は人であって、私は私なりに志向された通りに生きることが全てであると覚悟を決めてからは、肝が据

わった。というか、神様のおっしゃる通りにすれば十分という、安定感が生まれた気がする。

心のバランスが取れるにつれて、物事はそれほど悲観的に見えなくなり、肯定的に捉える見地が醸成されて来ている感じがあるのである。この事と信仰とどういふ関係があるか、俄かに見究め切れないけれど、決して無関係とは思えない。

まだまだボーツとした信仰しか持っていないが、先々が楽しみという期待なら十分持ち合わせている。

## 九 一対一

エクレシヤ、という呼び名がある。意味は「呼び出された者の集まり」だそうだ。

初期キリスト教会があつたローマ圏で名付けられたラテン語名で、邦訳では教会堂。

誰に呼び出されたかは、言うまでもなく神様、主イエス・キリストと父なる神と御聖霊。つまり、教会へ来て神様を信ずるようになった者を指し、信者は皆エクレシヤの一員、エクレシヤの構成員ということになる。

信仰の父と言われるアブラハムは、さしづめ神に呼び出されたエクレシヤ第一号、あるいは先駆者。使徒パウロも、しかり。

彼は信者宛ての手紙の冒頭に、自分のことを「人からでもなく、

人によつてもなく、主イエスと父なる神によつて立てられた使徒パウロ」と、身分を明らかにするのが常だった。エルサレムの伝道本部から任命された使徒とは、口が裂けても言わなかった。まさに、プロテスタント第一号の名に相応しかった。主なる神と私と一対一、これが基礎。自分に倣えと口を極めて彼が言つたのも宣なる哉、と言うべきか。

## 十 鶴(セミ・フィクション)

日本が戦争に負けて間もなく、物がなくて着るにも古着、食うにも粗食、住むにも貧家しかなかった時代、教会に珍しくちやんとした衣服に身を包んで現れる長身白哲(はくせき・肌の白い事)の美青年がいた。人呼んで「掃き溜めの鶴」と、秘かにもてはやした。

当時は、東、伊規須、高木の威勢のいい三兄弟が三羽鳥の如く、巾を効かせていた。鶴様の又の名は、廣田壽氏。

壽氏が病氣入院中、見舞いに赴いた三羽鳥殿は、すでに来合せていた現壽氏夫人の若かりし結婚前の美形と鉢合わせし、なるうことなら壽氏と代りたいと思つたかどうか、それは知らない。後日、「廣田兄が鶴なら、俺達は掃き溜めか」と語り合つたという。

その東兄も、高木兄も、すでに地上に見ることはできない。

ひとり伊規須先輩のみが現役引退の身を要介護の施設で日夜祈りに専念しつつ、隣人のために御用を果たしていると聞く。  
見えない羽で羽ばたく車いす上の鶴、よろしく。



## アジア大会回想記

長田 正幸 (前田)

### 一 はじめに

一九六二年五月、びわ湖毎日マラソンで私は優勝した。  
その年、インドネシアで開催されるアジア大会の代表二人を選ばれた。二四歳の時だった。

大会までの三カ月半、練習に励んだ。何しろ初の日本代表、日の丸をつけて走るのである。恥ずかしくないレースをしなくては、と内心燃えるものがあった。と同時に、勝負は時の運、負けることもある。全力を出し切って負けるなら、よしとしなければならぬとも自分に言い聞かせた。



びわ湖毎日マラソンゴール



合宿の宿舎前で

びわ湖でのマラソンのように無心で走ろう、人事を尽して天命を俟つというではないか、と心構えを据えた。

キリスト教徒の洗礼を受けていたなら、「天のお父様、感謝してお祈りいたします。今回のマラソンは三〇度を超すコンディションのレースになるかも知れません。どうぞ的確に対応できますようにお導きください。私の力のすべてを出させてください。しかし、御心のままに。主、イエス・キリストの御名に感謝してお祈りいたします」と祈ったであろう。

## 二 アジア大会

第四回アジア大会（インドネシア・ジャカルタ）でのマラソン優勝は、一九六二年八月二九日。五〇年前のことである。

往時茫茫という。たしかに忘れているところもある。鮮明に憶えているところもある。

日誌、新聞、陸上競技マガジン等をもとに、まとめた。

（レース中の順位・記録は、主として高木マネージャーのレポートによった。）

### （コースの概略）

コースは変則十字架。陸上競技場をスタート。二<sup>＊</sup>地点が十字架の先端。四<sup>＊</sup>地点で左折。九<sup>＊</sup>地点（十字架右端）で折り

返し。直進して二〇<sup>＊</sup>地点（十字架左端）で折り返し。二六<sup>＊</sup>交差点で左折。二八<sup>＊</sup>地点（当初の二<sup>＊</sup>地点と同じ）折り返し。直進して三四<sup>＊</sup>地点（十字架の最低部分）折り返し。後は十字架の先端経由、ゴールまで八<sup>＊</sup>余直進。全走行距離は四二・一九五<sup>＊</sup>である。

### （競技の経過）

レースは十六時ちようど、セナヤン陸上競技場をスタート。うす曇り、二<sup>＊</sup>付近で直射日光となった。九<sup>＊</sup>過ぎたあたり（十六時三〇分ごろ）ではアスファルトがベトベトに溶け、光つて見えた。赤道直下、三〇度以上の気温だったと思う。

十二<sup>＊</sup>付近は、中尾（敬称略）と私が併走していた。四位・五位であった。

この地点は直線で、前方を見ると前のグループが豆粒のように見えた。四百<sup>＊</sup>はあつたらうか。私は日本の国内一万<sup>＊</sup>ランキング二位なので、出場マラソン選手の中では、スピードでは誰にも引けはとらないと内心自負していた。

それでもスピードアップはしないとの思いを定めていた。過去のレースでも暑さにやられた苦い経験がある。

中尾は前との距離を見て慌てた様子であった。「先に行く」と言って前を追いつけた。まだ十二<sup>＊</sup>である。

どこかの国の一人に抜かれた。よく憶えていないが、写真の光線の具合からすると、二〇<sup>キ</sup>過ぎか。



20<sup>キ</sup>過ぎを並走

二五<sup>キ</sup>付近(スタートして一時間半、十七時三〇分頃)から日がかげり出し、気温は一度、二度と下がっていくと予想。それまでは遅いペースで行くことにした。(前半一<sup>キ</sup>当り三分四〇秒、後半三分三〇秒の予定)

二四<sup>キ</sup>付近に我々のお世話をされていた高木四郎マネージャー(選手団としてマラソンコーチは同行していなかった)が立っていて、「トップと二分五三秒差。六位」と怒鳴った。

私は耳が悪いが、高木さんの声はよく聞こえる。

中尾は四位という。予想以上に離れたかな。いやトップは私の作った平均ペースを少し速い程度であり、想定範囲と思うことにした。

一方では、彼らは最後まで体力が続くのかな。本当に上位がそんなに実力があり突っ走ってしまうなら仕方がない。

これから少しずつペースを上げて銅メダル狙いといくかとも考えた。レース中は、いろいろ考えるものである。

二五<sup>キ</sup>付近で「頑張ろう」と言つて、中尾を抜く。二六<sup>キ</sup>交差点前に日本選手団が並んでいて四位という。高木さんは私を六位と言った。

わずかな距離を走つて中尾一人を抜いたから、五位のはず。(その間にレースを止めた選手が別にいたとは考えが及ばなかった)。どっちかが間違っているのか。六マイナス一は五ではないか。単純な引き算を何度も行う。

二八<sup>キ</sup>の手前で高木さんが「中尾が歩き出して中止した。長田、頼むぞ、頑張れ。」とまた怒鳴った。

後で、高木さんは「長田は首を縦に振つてうなずき、頼もしかった。」と陸上競技マガジンに書いていた。そのようなしぐさはあったかも知れない。「これは大変だ。いよいよ日本の成績は、おれ一人にかかってきたぞ。」

他方「頼むぞ」と言われようと、「中尾が止めたから頑張れ。」と言われようと、「自分のペースを無理に上げるな。」(ペースはほんの少し上げていたが)と内心思ったのも事実。

走っているときは、単純な計算を合々の合わないのと、牛の胃袋のように、反芻して出したり入れたりする。また掛け声に、肯定してみたり、反論してみたり、種々頭を駆け巡るのである。



会社（八幡製鉄）のチーム仲間が言っていたのを思い出す。「走っているときは、異常な心理状態になりますネ。百は離れていてもすぐ追い抜かれるのではないかと、脅迫観念にとらわれ、後ろをしきりに振り返りたくありませんヨ。」と。

二九<sup>＊</sup>地点で、一人の選手が歩道を枕にのびていた。おれは何位かな、と思っていたら、わずかに走ったところで「二番だ」と声があった。おや？四位が正なら、もう一人はどこへ行っただ。ここで、ははア、走るのを止めてどこかへ行ったのだと思いついた。中尾を含め四人が止めたのだ。

銀メダル！

赤道直下では黄昏時が短い。太陽がストーンと落ちる感じ。

いよいよ暗さが色濃くなってきた。先頭とはどのくらいの差か。いつまでも見えてこない。情報もない。沿道の観客もまばら。温度は二七度か二六度か。涼しくさえ感ぜず。

疲れはあるが、倒れるほどには至っていない。余力を残してきたのだ。まだ距離は一〇<sup>＊</sup>残っている。

マラソンで三〇<sup>＊</sup>過ぎ、二時間近く走っていると、「長い距離を走ってきたな。きついな、疲れたな。まだ一〇<sup>＊</sup>余りあるのかよ。」と、どの大会でも思いつ。

三四<sup>＊</sup>の折り返しを過ぎ三五<sup>＊</sup>付近で、在留邦人二〇〜三〇

人の一団がいた。一人で持てないような大きな日の丸。

突然、「二番だア」と大きな声。

あれ？先頭はどこへ行っただ。またどこかへ消えたのか。

……歓声。拍手。

六位と言われてから、上位五人がリタイアしたことになる。

三位、二位、一位と一人ずつ颯爽と抜き去ったのではない。

いつの間にかトップになっていたのだ。実感がわかなかった。

しかしこうなると、金メダルだ！と嬉しくなって元気が出てき

た。同時に心の中に慎重に走れよという声も聞こえてきた。ペ

ースは遅くて構わない、倒れなければいいのだと。

すれ違った二位は、目の子勘定で五分以上差はあると見た。

そういうわけで最後の五<sup>＊</sup>は自分を大いに甘やかして、ペース

を落とし気味にして、街灯の照らす暗くなった走路を、口笛吹

きたいような気持ちで、気分よく走ったのである。

タイムは、二時間三四分五四秒二（二位と八分五六秒差、三

位とは十五分〇三秒差）の優勝。

第四回大会にして、日本人初のマラソン金メダルであった。

（大会は、四年に一度開催される。）



遂にゴール



表彰状



アジア大会金メダル

### 三 勝因

朝日新聞の宮本記者が密着取材していて、優勝直後に手記を書けという。それが四日後の朝刊に載ったので、その一部を引用する。

① 高橋(進) コーチの練習スケジュールが良かった。  
(高橋さんは同行していなかった)

スケジュールの基本は、リディアード氏(ニュージーランドのオリンピックコーチ)の方法で、持久力を中心としたもの。それまでは、チェコのザトペックが実施していたインターバル練習が中心であった。

八幡および甲府での耐暑訓練、久住・霧ヶ峰高原の長距離練習など三カ月も前から細かく計画されていた。

② コースの研究を行った。

マラソンの記録で、最も大きく影響するのは気温である。特にジャカルタは直射日光が強い。そこで私は八月二十六日(レース三日前)、出発時刻に合わせ、路上の気温を計測した。三時半、三五度。スタートの四時、三二度。(途中省略)五時、(十八度付近)二九・五度。六時半、二七・五度(ゴール)。五時過ぎには光線が弱くなり、涼しくさえ感じられる。

③ 経過予定タイム表を作った。

この気温では優勝は二時間三〇分と見込み、平均タイムで走ると遅くして走るペースを並べて作り検討した。

レースのペースは平均したペースよりも二五<sup>キ</sup>までは一<sup>キ</sup>当り一〇秒遅くし、三分四〇秒とした。それ以降は気温をにらみ、三分三〇秒に早める。

通算では、前半一<sup>分</sup>〇<sup>秒</sup>七<sup>秒</sup>遅くなり二〇<sup>分</sup>二<sup>分</sup>一<sup>分</sup>四<sup>秒</sup>遅くなる。二五<sup>分</sup>二<sup>分</sup>四分八<sup>秒</sup>の遅れ。(実際のレースでは高木さんが二四<sup>分</sup>二<sup>分</sup>五<sup>分</sup>三<sup>秒</sup>差と怒鳴ったのと比較されたい)。

これを目標にしていたので、他の選手が速いペースで先行しても、さして驚かなかった。

#### ④ 帽子を被った。

試合前それを水でぬらした。中尾選手はスタートのとき曇っていたので被らなかつたが、まもなく強い直射を受け失敗した。アスファルトは溶け、ベトベトになり、道は光って見えるほどだった。

#### ⑤ 飲み水の用意。

レモンジュース、ブドウ糖、はちみつ、抹茶を混合し、十五<sup>分</sup>以降の五<sup>分</sup>〇<sup>秒</sup>ごとに用意して、かならず飲んで走った。

#### ⑥ 耐暑訓練を四週間前に行なった。

宮本記者に対する手記には書かなかつたが、今にして思えば、これが最大の勝因であつた。霧ヶ峰(長野県)で合宿中、マネージャーの高木四郎さんに「諏訪湖のまわりを四〇<sup>分</sup>〇<sup>秒</sup>走りたい」

と申し出た。

高木さんはすぐに地図を買い、糸で測り倍率を掛けて一周二〇<sup>分</sup>と算出した。現地へ行き、スタート。レース四週間前、なしろ八月二日の午後一時過ぎである。気温は三三〇<sup>度</sup>四度はあつたろう。一周まわつた頃、たまらずガソリンスタンドへ駆け込み、水をくださいと言つて、ホースで頭からジャブジャブ掛けてもらった。練習のわけを言つたらオジさんは、「がんばれ」と励ましてくれた。

かくしてようやく四〇<sup>分</sup>〇<sup>秒</sup>を三時間三〇分で走破した。

この耐暑訓練によつて今度のマラソンの前半は遅くしなければ後半が危ういと予測し、計画を練つたのであつた。

#### 四「生理学的立場から見れば」東京大学教授 猪飼道夫

(陸上競技マガジン一九六二年一〇月号から、中長距離種目のみ抜粋)

(参考) アジア大会、日本・中長距離陣の成績

(種目) (氏名) (順位) (記録)

※八百<sup>メートル</sup> 森本 葵 ① 一分五二秒六

岩下 察男 ④ 一・五四・一

※千五百<sup>メートル</sup> 岩下 察男 ③ 三・五一・五

猿渡 武嗣 ④ 三・五三・五

※五千<sup>メートル</sup> 横溝 三郎 ② 一四・三〇・二

船井照夫 ⑤ 一五・〇一・六  
船井照夫 ② 三〇・二一・六

青木積之介④ 三一・十五・八

※三千円障害物 横溝三郎 ② 八・五八・八

奥沢善二 ③ 九・〇九・六

※マラソン 長田正幸 ① 二・三四・五四・二

中尾孝行 ……(棄権)

マラソンの優勝でほっとしたが、長距離では苦杯をなめた。

調子さえ出れば相当やれたはずなのに、調子が出なかつたと見える。スピードは相当できているから、一般持久性の不足ということになる。最後のスパートが出ないということとは持久性がぎりぎりだということである。ベストコンディションにないときに、いかに戦えるかという最低線がゆるいといわざるを得ない。横溝、中尾選手たちは、アベベ(注1)、カントレク(注2)に次いで体力テストはよかつた。長田選手は劣つていた。(長田注、肺活量は二八〇〇程度。握力・背筋力は他選手よりもはるかに弱かつた。おまけに柔軟性も最低であつた)

しかし、マラソンや長距離はテストに現れない要素が入ってくる。全距離を必ず走破するという「野生」が欠如していたら、いくらテストがよくてもだめなのである。

この野生を根性という人があるかも知れない。他の言葉でいえば「意志の持続」というものである。トレイニングは、やはり全距離を走破する練習以外にはない。身体の面からいえば、持久性というものは、トレイニングで大いに進歩するものであるが、トレイニングをやめれば退歩することも早いものである。

さらに、長距離、マラソンではスピードの配分の研究を各個人についてやる必要がある。それは全距離にわたるスピード測定をすることであるし、わたしは短距離でやつたと同様のスピード曲線によるスピード調整の研究をぜひやりたいと思つている。日本のトラックは短距離よりも長距離、マラソンにより多くの可能性のあることは誰も納得するところであるから。

注1 アベベIIエチオピア。ローマ・東京オリンピックのマラソン優勝

注2 カントレクII当時チエコスロバキヤ。朝日国際マラソンで好成績

## 五 むすび・勲章

アジア大会優勝以来、初対面の人に紹介される際、ほとんどが「アジア大会金メダリストの長田君(さん)です。」である。ありがたいことである。私の勲章なのである。

① 北九州市の依頼でウォーキング教室・ジョギング教室を二個所の競技場で年間八十時間、十年以上担当しているが、開

講時に「アジア大会金メダリストの長田講師」と紹介される。さきごろ塔野市民センターでミニウォーキング教室を開いた。四カ所目。ここでも金メダルと紹介された。

② 二〇一一年暮れ、「本城ながたジョギングクラブ」(会員四〇名)を毎日新聞が取り上げてくれたが、「代表の長田さんはアジア大会で日本人初の金メダル受賞」と記事にした。

③ 福沢諭吉ゆかりの中津市民マラソンでは、大会実行責任者が一歳年下で、昔、箱根駅伝においてお互い母校の名誉のため競った仲である。大勢の前に私を立たせ、「長田さんは新日鉄陸上のOBです。現役時代には、日本が優勝を逃してばかりだったアジア大会マラソンで、日本人初の金メダルを獲得した人です。」とアナウンスしてくれた。

④ 現役時代のことを書く。  
ニュージールランドへ日本代表五人の一人として二カ月間遠征した。Aリイディアード氏(前掲)に指導してもらったためである。陸上連盟からの通知だろう、私がリイディアード練習法でアジア大会を制したことを知っておられた。

氏は、オリンピック大会のスネル(八百員・金)、ハルバー

グ(五千員・金)マギー(マラソン・銅)を一挙に育てた人である。懇切丁寧に指導してもらった。仕事の都合で選手は交代しながら一緒に練習してくれた。次の年、君原、円谷選手(二人ともオリンピックのメダリストになった)が遠征し、力をつけて、日本マラソン界飛躍の要因になったのである。

お別れパーティが開かれた。関係者六〇人ほど集まり、歌う、踊るの賑やかさ。私も歌った。

「アジア大会のチャンピオン、踊ってくれ。」  
「ダンスはやったことがない。」(ブローケン英語)

「ツイストならできさるだろう。ベイリーの奥さんどうだ。」  
全員ダンスを止め、奥さんと私が真ん中に立たされた。どういうわけか、スキヤキソング(坂本九「上を向いて歩こう」)がかかった。

旦那のベイリーが近寄って、「もつとくつつけ」、「お尻を大きく振れ」と手で示しながら言う。二人の尻の動きを中腰で見ているのである。

満場、爆笑。(国際親善のひとつコマ)。

⑤ 仕事上の関係で外部での交渉、本社などとの折衝で良好な結果を得ることがあった。金メダルのおかげである。

⑥ そのほか苦勞したとき、困難なことに直面したときに、アジア大会の経験が支えになったかというとあまり記憶にない。別項に書いたように、前立腺がんの温熱療法においてひどく高熱に曝されたとき、アジア大会のことを思って頑張ったことが記憶に新しい。

また、新入社員教育担当の折のことを憶い出した。体力づくりの一環として、湧蓋山・九重山登山を二日間行なった。次のグループが翌日到着、また同じコースを辿ったときは最後に音を上げそうになったが、このとき灼熱のマラソン体験を脳裏に描いて頑張ったことがあった。

しかし今は、信仰によつて頑張らせていただけると思っている。

以上

## アメリカ西部大自然紀行記

正野 眞宏（前田）

私達夫婦はほぼ毎年、神様が「甚だ良かりき」と言われて、この地球上に素晴らしいものを造ってくださっている世界を、できるだけ見てみたいと、好奇心を募らせて、いろんな所へ行かせていただいているが、グランドキャニオンをはじめとするアメリカ西部の大自然の景観をテレビで見ると、いつか行ってみたいと思っていた。この度、その機会を得たので、（信仰面は薄いが）その報告をしたいと思う。

申し込んだツアーは、平成二十四年六月四日から一週間で、銘打って「七つの絶景を巡るアメリカ大自然紀行七日間の旅」である。魅力があったのか、三九名という大人数となった。

内容を例示すれば、①世界有数のパワースポットと言われる「セドナ」、②途方もなく続く壮大な渓谷「グランドキャニオン」、③グランドキャニオンを流れるコロラド川が馬蹄形に蛇行している「ホースシューベント」、④幻想的な空間が広がる洞窟のよな渓谷「アンテロープキャニオン」、⑤西部劇でお馴染みの「モ



ニユメントバレー」、⑥侵食された無数の岩が立ち並び、不思議な景観の「ブライスキャニオン」、⑦巨岩群と溪流美の「ザイオン国立公園」である。

これらは「グランドサークル」というユタ州とアリゾナ州境にあるレイク・パウエル（コロラド川をグランドキャニオン上流で堰止めた人造湖で、全米第二の大きさ。水域は三〇〇キロを超えるそうである）を中心にした半径二二〇キロ、一周二四〇〇キロのエリアにあり、前記以外にも大自然が織りなす美しく雄大な景色が広がっている。従って、一日の行程はバスで四、五〇〇キロに亘るもので、かなりハードであるが、退屈することはない。

福岡空港から韓国のインチョン空港を経由して、十二時間かかってロスアンゼルス空港に到着。ここで遭遇したのが、テロ防止のための入国審査の厳しさである。一人ひとりの聞き取りに時間がかかるばかりか、顔写真と指紋まで取る。英語が喋れない私は人相が悪いのか、いろいろ聞かれて、なかなか出してもらえず、待つ時間を含めて二時間近くかかった。

サンタモニカ海岸、映画の都ハリウッドを見て、一路ラスベガスへ。地図を見ると近いが、それでも四〇〇キロを超える道のりで、途中はネバダ砂漠である。ロスアンゼルスも元々は砂

漠だったとか。そこに水を引いて、緑の土地に変えたそうである。それゆえ、今でも水は貴重品である。日本はどこへ行っても、緑豊かな山々と水をたたえた川がごく自然な風景となっているが、ここネバダ砂漠にはそれが無い。日本はつくづく恵まれた国だと思ふ。私は数年前、イスラエルのネゲブ砂漠を通ったが、ここはそれよりも大きいと思つた。地面に這いつくばつたように生える、背の低い木々が見えるだけで、荒涼たる原野がどこまでも続く。アメリカ大陸の大きさ、自然の前の人間の小ささを思わざるを得ない。

私はふと、アメリカの文化はキリスト教の影響も大きいが、この大自然の中で培われたものに違いないと思つた。移民を受け入れる懐の広さや陽気で大らかな考え方、料理にしてもドカンと出てくる。一方、日本の細やかな心配りや繊細な日本料理などの文化は、やはり狭い島国の中で育まれたものであろう。どちらが良いとか、優れているというのではなく、神様はそれぞれの人種と文化を備えられたということである。それをお互いが理解し、受け入れることが必要なのであろう。

飽くほど走ったネバダ砂漠のど真ん中に、忽然とラスベガスの街が現れる。ここはネバダ砂漠のオアシスだった所で、ゴールドラッシュ時のカルフォニアへの中継地として栄えたこのこと。そういうこともあって、周りの荒野とは対照的に、人工の

ものばかりで、人間の欲望を満たすものがすべて揃っていると  
言って良い。カジノばかりではなく、サーカス、手品に至るあ  
らゆるエンターテインメントが見られる。それも一流である。三  
日かかっても見終えることはない。様々な趣向を凝らしたホテ  
ル。私が泊まったホテルはルクソールという名だが、ピラミッ  
ドもスフィンクスもある。パリのエッフェル塔や凱旋門をドン  
と建てているホテルもある。とにかく個性豊かなホテルが林立  
し、何でもありなのだ。それがアメリカだと実感する。ナイト  
ツアーで噴水ショーなどを見て、ホテルに帰ったのが夜十二時  
過ぎ、それでも街の明るさは変わらず、人通りも絶えない。こ  
こは文字通り、不夜城である。

翌日、世界有数のパワースポットと言われる「セドナ」を目  
指す。途中で、大陸を横断する昔の幹線道路だった「ルート66」  
沿いの小さな街に寄った。ハイウェイができて今は閑散として  
いるが、古き良き時代の面影を残しており、クラシックカーや  
プレスリーなど懐かしいスターの写真がそのまま残っている。  
最近、自然を壊さず自然に沿ってゆっくり走るこのルート66  
が、見直されているとか。先年、「カーズ」というアニメが上映  
されたが、ここが舞台となっている。人間は競争社会の中で、  
物の豊かさや早くて便利な経済性を追求しているが、神様は人

間をそんなバタバタ忙しく動き廻るようには造られなかったの  
ではないだろうか。「何を喰らい、何を着んと思いたい煩うな」とあ  
るように、もっとスローライフで良いのである。だから、こう  
いった自然を見、触れることで、心の豊かさやゆったり感を実  
感することを求めて、集まってくるのだと思った。考えてみる  
と、私もそのひとりである。



セドナの岩山（車窓から）



さて、セドナに着いたが、街の周囲をそそり立つような赤い岩山に囲まれている。ここはネイティブ・アメリカン（インディアンの呼称は差別語とのこと）の聖地とされ、赤い岩は鉄分を含んで、特殊なエネルギーを発すると言われて、年間四百万人が訪れるとのことであるが、そのパワースポットに立つても、私は何も感じなかった。しかし、一つ一つの岩山は素晴らしく、それが無造作に立っている。この一つだけでも日本に持ち帰れば、観光名所となることは間違いない。日本のそれとは、比べ物にならないスケールなのだ。

旅行三日目は、グランドキャニオンを目指す。ここは地層の隆起作用と数億年に及ぶコロラド川の浸食とによって造り出されたもので、地球四六億年の歴史が体感できるとの触れ込みである。地層にそれが現れているとのこと。とにかく全長四六〇<sup>キ</sup>、深さ一六〇〇<sup>ミ</sup>、幅六〇三十<sup>キ</sup>というとても大きいスケールである。その大きさは、写真に切り取っては分からない。ここばかりは、来て見なければ分からないと思った。遙か下の方にコロラド川が流れているのが見えるが、いったん降りると、余程の健脚でないとその日には帰れない。ここは標高二三〇〇<sup>ミ</sup>の高地で、空気も薄いか。絶景ポイントをシャトルバスで移動したり、歩いたりするのだが、我々はほんの一部を見たに

過ぎない。その大きさに、ただただ圧倒されるばかりである。



グランドキャニオン

グランドキャニオンを後にして、コロラド川が馬蹄形に蛇行するホースシューベントに向かう。説明はいらない。まずは写真で見てもらおう。

高さ三〇〇<sup>ミ</sup>あり、柵もないので、腹ばいになって底を覗き

込む。年間何人かは風にあおられて転落するそうである。現地ガイドさんから、私の職を取り上げるような事はしないでくださいと言われた。それにしても、不思議な景観である。水は弱い所弱い所を流れ、気の遠くなるような長い年月を経て、形成されたのだろう。正に神様の成せる業である。



馬蹄形のホースシューベント

四日目は、アンテロープキャニオンへ行く。アンテロープと

は、現地人のナバホ族の言葉で「水が岩を流れる場所」という意味だそうである。今もナバホの人達が近くの町からここまで我々をトラックの荷台に乗せて運び(道が舗装されていないので、西部劇の馬車以上の揺れで振り落とされそうであった)、いろいろ説明したり、写真も撮ったりしてくれる。

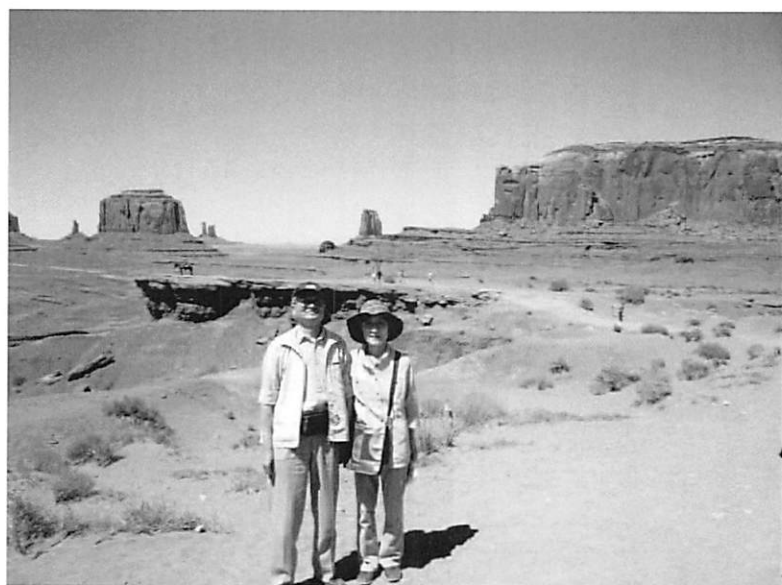


光が差し込むアンテロープ

ここは時々降るモンスーンが鉄砲水となって隆起した砂岩を浸食してできた狭い峡谷で、入口から見ると、岩の割れ目のように見える。中に入ると、様々な形をした赤い岩肌に光が差し込み、幻想的な空間を醸し出す。四十ほどの峡谷を見上げれば、太陽の光が時にはハート型に、時には猫の目のように光る場所もある。世界にはこんなすごい所もあるのだと、ある意味、今回の旅行で一番印象に残った場所である。

アンテロープに別れを告げて、西部劇の原風景となったモニユメントバレーへ向かう。西部劇と言えば、アメリカの西部開拓史で、ネイティブアメリカン、つまり先住民は悪者のように描かれているが、先住民にすれば、彼らは自分達の土地を奪う侵略者である。我々の認識では、英国のピューリタンが信仰の自由を求めて新大陸を目指したのだから紳士的であって、先住民が野蛮な対応だったのではないかと思われがちであるが、事實は逆で、大量虐殺が行われ、かのリンカーンでさえ、加担したとのことである。欲にかられた多くの人が入国し、一獲千金を狙って、西部を目指したのである。

ここはジョン・フォード監督などが好んで映画を撮った場所である。ジョン・ウェイン主演の「黄色いリボン」(車中で上映してくれた)で、撮影に使った小屋が残されていた。「モニユメント」とは、記念碑という意味であるが、雨による浸食や風化によって、文字通り記念碑のようにそびえ立つ岩山が林立している。ここもナバホ族が住んでいたが、一人のアメリカ人がこの素晴らしい景色を見て、ジョン・フォード監督に売り込んだのが始まりらしい。今ではそのアメリカ人はナバホ族に恩人とされ、銅像まで立っている。それにしても、よくぞこんな荒野に住んでいるものだと、感心する。

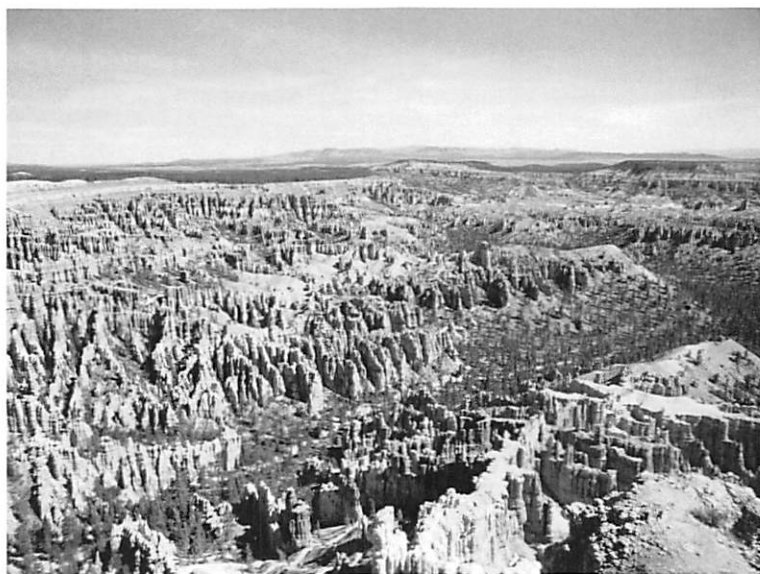


ジョン・フォードが好んだ地点から見たモニユメントバレー  
向うに馬に乗ったカウボーイの姿が見える。

旅行最後となったこの日は、ブライス・キャニオンとザイオン国立公園を目指す。

ブライス・キャニオンは、これまでの岩山の浸食とは異なり、「土柱」と呼ばれる独特の地質構造を有する。土柱は、風、水、

氷による川床と湖床の堆積岩の浸食により形成されたもので、土柱の形状は、トルコの Cappadocia の石柱に似ていると思っ  
た。



土柱が立ち並ぶブライス・キャニオン

赤、橙、白の無数の岩の塔が立ち並び、日本では見ることで  
できない想像を超えた風景を見せてくれる。私には別な惑星に

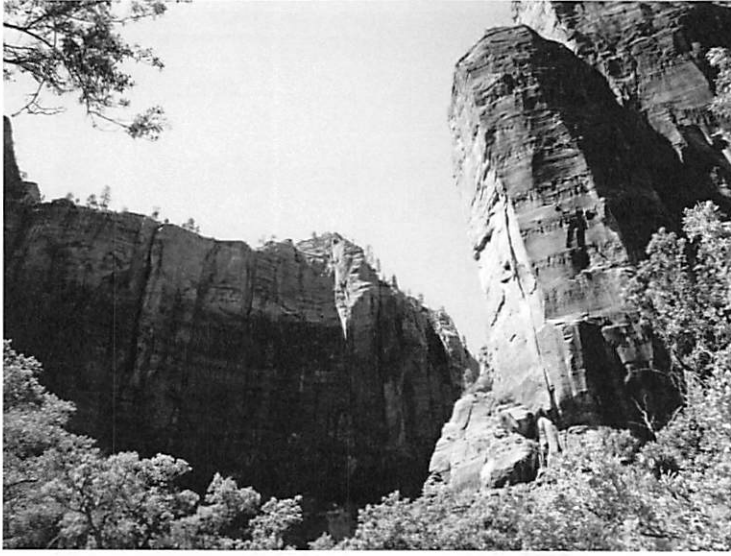
来たのではないかと思えたほどである。上から見ると、ローマの円形闘技場遺跡のように見えなくもない。ここはユタ州のブライスキャニオン国立公園内にあつて、公園内をバスで移動するほど広く、標高はグランドキャニオンよりも高くして二四〇〇  
フィート、ブライスは発見者の名前とこのことである。

続いて、ザイオン国立公園へ行く。

ここはユタ州にあり、二四キロにわたつて、砂岩が侵食されて形成された七〇〇フィートを超す巨岩石とノース・フォーク・ヴァージン川による溪流美が織りなす自然の芸術とも言うべき地で、いままでは雨や緑のない乾燥した赤茶けた死の大地のようであつたが、ここは水が流れ、木々が生い茂つて、心が和む。しかも、これまで上から溪谷を眺めていたが、ここでは下から岩を仰ぎ望むことができ、その圧倒的な高さで迫力を感じ取ることができた。

ザイオンとは、「神の住む町」との意味だそうで、ここもモルモン教徒によつて発見されたとのことである。ちなみに、ユタ州にはモルモン教の本部ソルトシティがあり、州の六割がモルモン教だそうである。小さな町にもモルモン教の教会があり、尖塔には十字架ではなく、針のような形のモニュメントが建つていた。詳しい事は分からないが、十字架を信じていないので

はないかと思った。モルモン教は正式には末日聖徒イエス・キリスト教会と言われ、一八三〇年にジョセフ・スミス・ジュニアによって創始されたが、カトリック、プロテスタントとも、異端としているとのことである。



ザイオン国立公園の巨岩群

これで「七つの絶景」観光がすべて終わり、再びラスベガスに戻った。このグランドサークルをバスで走ること二三〇〇キロ

余、その間、小錦のように肥った中年女性が一人で運転してくださったが、とても気さくで、重いトランクの積み下ろしも、「私のレクレーションを取らないで。」と、手伝おうとする我々を制してさせてもらえなかった。これもアメリカだと実感する。ラスベガス空港から韓国インチョン空港経由で、六月九日朝、無事に福岡空港に到着した。その日は日曜日だったので、その足で福岡大濠公園教会の礼拝に出席し、午後、帰宅することができた。

出発時、一つの祈りの課題があった。それは二月に脊柱管狭窄症になり、それがまだ完治していない状態だったので、長時間の飛行時間を座ったまま（腰痛に一番悪い姿勢）で悪くなって、痛みが出るのではないか。観光であちこち歩き回る途中で歩行困難になるのではないかという心配である。行きの飛行機では、用心のために腰にコルセットをしていたが、到着後は、現地の暑さもあってそれを外した。ところが、少々歩き回ってもほとんど痛まず、腰痛の事も忘れるぐらい、神様は守ってくださった。帰りの飛行機もコルセットはしないまま通し、以後、おさらばとなった。有り難いことである。

今回の旅行の一番の印象は、天地創造の自然がそのまま残されて、御業の壮大さの一部を見せていただいた思いがしたことである。ネゲブ砂漠にしる、グランドキャニオンにしる、大地



が隆起してロッキー山脈を形成し、気候変動があり、長年の浸食作用などの地球活動の結果であるが、現地人がそこに神を見出したように、「神の見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られている」(ローマー・ニコ)ことを認めざるを得ないのである。



2013年1月1日 大濠公園教会



2013年 新年聖会

## 編集後記

「しかし、わたしは自分の行程を走り終え、主イエスから賜った、神のめぐみの福音をあかしする任務を果し得さえしたら、このいのちは自分にとって、少しも惜しいとは思わない。」

(使徒行伝二十・二四)

この年も、恵みの内に、無事「ぶどうの木」発刊に至ることが出来た事を主に感謝する。

毎年の編集のご用に与って思うのだが、そこにはいつも人間には推し量ることのできない、神様の摂理がある。特集を組んだ訳でもないのに、皆様から寄せられた記事を並べるとき、そこに一つの「流れ」の様なものを感じるのである。

今回は、先に天に帰られた姉妹に触れる記事が、多く寄せられた様に思う。お一人おひとりが与えられた地上での生涯は、実に様々であるが、しかしその中で一貫しているのは、その方々の生涯を通して、主の栄光が、実に生き生きと描き出されていることである。まさに「お一人おひとりが、「神の恵みの福音をあかしする任務を果し得」たと言えるのではないだろうか。

今この書を読む私達も、この任務に与っている者としての行程を走り続けたい。またその行程の一端を、この「ぶどうの木」を通して、分かち合っていたきたいと願うのである。(望)

発行 二〇一三年五月

発行者 福岡市中央区鳥飼二丁目二二六

基督伝道隊 福岡大濠公園教会

牧師 榎本和義

発行所 基督伝道隊

福岡大濠公園教会

八幡前田教会

戸畑教会

印刷製本 北九州印刷株式会社